

# 2011 年度 事業報告書

連携協定締結記念シンポジウム／ECO opera!

## “西池袋”を刺激する！

—東京芸術劇場×立教大学による持続可能な地域づくり—

日時：2011年11月28日（月） 18:30～21:00（開場 18:00）

会場：立教大学 池袋キャンパス 7号館1階 7102教室

主催：立教大学

企画・運営：立教大学 ESD 研究センター

後援：豊島区



# 目 次

## 概 要

東京芸術劇場と立教大学の連携協定	2
東京芸術劇場について	2
立教大学 ESD 研究センターについて	3
当日のタイムテーブル	3

## シンポジウムの記録

開会挨拶	
吉岡 知哉（立教大学総長）	5
イントロダクション「シンポジウムのねらい＝ESD・地域・文化・大学＝」	
阿部 治（立教大学 ESD 研究センター長 社会学部・異文化コミュニケーション研究科教授）	6
基調講演①「企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり ——大学とのコラボレーションの事例から——」	
福地 茂雄（東京芸術劇場館長）	9
基調講演②「東京芸術劇場と立教大学の連携について ——劇場の歴史・劇場の役割・大学について・大学と地域／劇場——」	
高萩 宏（東京芸術劇場副館長）	15
パネルディスカッション [～質疑応答]	
「西池袋の持続可能な地域づくりにおける〈劇場×大学〉による協働展望」	
福地 茂雄、高萩 宏、吉岡 知哉、阿部 治（司会）	20

## 成果報告

「シンポジウム所感：東京芸術劇場と立教大学の協働可能性を考える」	
後藤 隆基（立教大学 ESD 研究センター RA）	29

## 参考資料

動員人数	36
アンケート集計結果	36
当日配布資料	41

# 概 要

- 日 時 : 2011年11月28日(月) 18:30~21:00(開場18:00)
- 会 場 : 立教大学 池袋キャンパス 7号館 1階 7102 教室
- 登壇者 : 福地茂雄(東京芸術劇場館長)  
高萩 宏(東京芸術劇場副館長)  
吉岡知哉(立教大学総長)  
阿部 治(立教大学ESD研究センター長/社会学部・異文化コミュニケーション研究科教授)
- 主 催 : 立教大学
- 企画・運営 : 立教大学ESD研究センター
- 後 援 : 豊島区

## 【東京芸術劇場と立教大学の連携協定】

2011年6月7日、立教大学総長室にて東京芸術劇場と立教大学との間で、これからの連携に向けた包括的な協定が締結されました。この協定は、公益財団法人東京都歴史文化財団東京芸術劇場と学校法人立教学院立教大学が、各々の施設の活性化および各種の事業を通じて、東京都における芸術文化振興に寄与することを目的としています。

この日、東京芸術劇場からは高萩宏副館長が、立教大学からは吉岡知哉総長が協定書を取り交し、東京とりわけ池袋における地域活性化と芸術文化振興に向けて連携し、協力し合うことを約しました。具体的な事業内容は今後協議することになりますが、双方が連携して行なう事業の企画・実施、広報協力、施設利用などの協力を行なう予定です。

今回のシンポジウムを実質的なキックオフとして、両者が位置する西池袋地域を巻き込む形での協働をめざします。

## 【東京芸術劇場について】

東京芸術劇場は、都民のための芸術文化の振興とその国際的交流を目的として、1990年10月に開館しました。世界最大級のパイプオルガンを有するクラシック専用の大ホール、演劇・舞踊等の公演を行う中ホールと二つの小ホールのほか、展示スペース、会議室、リハーサル室も併せ持つ都内最大級の複合文化施設です。現在、財団法人東京都歴史文化財団が管理運営を行なっています。

施設の特性を活かした個性的なプログラムとして、劇場の大きな特色であるパイプオルガンによるコンサートや講座を継続的に開催。また、読売日本交響楽団との事業提携により、セミステージ形式でオペラを上演する「シアターオペラ」等、質の高い演奏を実現しています。さらに今後は、都立唯一の劇場として、新たな文化の創造・発信を行なう拠点としての役割を担うべく、演劇部門での自主企画公演や、すぐれた活動を行なう芸術団体との共催・提携公演も積極的に行ないます。そうした活動を推進するために、2009年、日本を代表する演劇人、野田秀樹氏が初代芸術監督に就任しました。以降、古典の新演出から既成のジャンル分けを超えた

実験的な作品まで、さまざまなプログラムを展開し、教育普及活動への取り組みも始めています。

2012年度中の再オープン後には、より一層魅力的な劇場になるために、地域との結びつきに加えて、国際共同制作の強化もめざします。

### 【立教大学 ESD 研究センターについて】

ESDとは「Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育」の略称であり、「持続可能な未来や持続可能な社会を創造する力を育む、地球市民のための教育と学習」を意味します。2002年にヨハネスブルグで開催された国連環境開発会議における日本の提案を契機に2005年からの10年を「国連ESDの10年」とし、国内外で多様な活動が展開されています。

立教大学ESD研究センターは、2007年3月に設立された、国内の大学で初のESD研究機関であり、同年4月より『「持続可能な開発のための教育（ESD）」における実践研究と教育企画の開発』として、文部科学省平成19年度オープン・リサーチ・センター整備事業（～23年度）に選定されました。以来、日本国内およびアジア太平洋地域を対象に、主として「環境教育」と「開発教育」を切り口とするESDの実践的研究に取り組み、その普及に努め、また同地域におけるハブとしての役割を担っています。

本シンポジウムは、地球環境の保全・環境教育に取り組む産公学が連携し、市民との関わりの中で活動を広めることを目的としたプログラム「ECO opera!」（立教大学主催／ESD研究センター監修）の一環として企画・制作されました。

### 【当日のタイムテーブル】

- 18:30 開会挨拶（吉岡知哉）
- 18:35 イントロダクション  
阿部 治「シンポジウムのねらい＝ESD・地域・文化・大学＝」
- 18:50 基調講演①  
福地茂雄「企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり  
——大学とのコラボレーションの事例から——」
- 19:20 基調講演②  
高萩 宏「東京芸術劇場と立教大学の連携について  
——劇場の歴史・劇場の役割・大学について・大学と地域／劇場——」
- （19:50～19:55 休憩）
- 19:55 パネルディスカッション [～質疑応答]  
「西池袋の持続可能な地域づくりにおける〈劇場×大学〉による協働展望」  
福地茂雄、高萩 宏、吉岡知哉、阿部 治（司会）
- 21:00 閉会

# シンポジウムの記録

## 開会挨拶

### 吉岡 知哉（立教大学総長）

1953年、東京都出身。政治思想学会理事。76年、東京大学法学部卒業。法学博士。専攻は欧州政治思想史。研究テーマはヨーロッパ近代、主として18世紀フランスの政治思想。最近は近代政治思想における宗教の問題に関心がある。立教大学法学部教授を経て、2010年に第19代立教大学総長就任。著書に『ジャン＝ジャック・ルソー論』（東京大学出版会）。

みなさん、こんばんは。ようこそ立教大学池袋キャンパスへおいでくださいました。寒くなってきましたけれども、感覚としては、これからが芸術の季節だという気がしております。

今日のシンポジウムは、東京芸術劇場と立教大学との連携協定締結を記念したのですが、大学側にとっての大きなテーマは「大学と地域の関係のありかた」だと思っております。大学というものの自体は、11～12世紀以来の長い歴史がありますが、30年程前から、そのありかたが大きく変わってきました。シンボリックに言うと、それまでの大学は「象牙の塔」「白い巨塔」と言われる「塔」のイメージ、知識の集積の場という心象だったと思うのです。それが情報革命やグローバリゼーションといった様々な要因で変化してきて、現在では「これからの大学はいかにあるべきか」という問題が、非常に大きなテーマになっています。

このテーマを考えるときに、たとえば、市場の立つ広場、船が立ち寄る港町、ラクダの隊商が寄るオアシス——多様な人たちが集まって、交換が行なわれたり、アテナイのアゴラのように政治的な議論や芝居が行なわれたり、芸人が芸をしたりする。そういう「交流の場」というイメージが大学にとって必要になってきました。同時にそれは、大学に外の人に来るだけでなく、大学が外に出て行くことを意味します。立教大学では「地域は第二のキャンパス」という言い方をすることがありますが、第二、第三のキャンパスとして、学生や教職員が外に出て行く必要があるのではないかと。簡単に言ってしまうと「地域に開かれた」という表現になりますが、地域との結びつきが大事になってくるわけです。

とくに今年の3月11日、東日本大震災において、私たちは、大学が地域の中にあるということ強く実感しました。立教大学では、キャンパスの中で夜を明かした人が、約4500人いました。ここでちょっと休憩をとって、また家路を急いだ人もいたでしょう。実際には、おそらく1万人以上の人々が、あの夜、立教大学を歩いていかれたのではないのでしょうか。そういう意味でも、地域の中での大学のありかたを、真摯に考えていかなければならない。今回のシンポジウムは、その切り口のひとつという気がいたします。

今日は東京芸術劇場の福地館長、高萩副館長にお越しいただきました。実を申しますと、高萩さんのことは昔からよく知っておりまして、彼の話をするとう止まらない、というくらいなのですが（笑）。それも含めて、楽しい会合にしたいと思っております。今日はお集まりくださいまして、ありがとうございました。

## イントロダクション

# シンポジウムのねらい＝ESD・地域・文化・大学＝

### 阿部 治（立教大学 ESD 研究センター長／社会学部、異文化コミュニケーション研究科教授）

1955 年、新潟県出身。筑波大学・埼玉大学などを経て 2002 年から現職、現在、日本環境教育学会長、千葉大学客員教授、ESD 世界の祭典推進フォーラム代表理事、国連 ESD の 10 年政府円卓会議委員などを務めている。環境教育 / ESD のパイオニアとして、国内外における研究と実践にかかわっているが、特に現在は、国連 ESD の 10 年の提案者として、2014 年の日本における最終会合の開催に向けて尽力中。西池袋においても、学部のゼミ活動を通じて、NPO 法人ゼファー池袋まちづくりなどと連携したアイポイントや緑化活動などによる持続可能な地域づくりに携わっている。

こんばんは。本日はお忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます。ESD 研究センターのセンター長をしております、阿部と申します。立教大学は、本当に外向けのイベントが多い大学です。毎日、複数の講演会やシンポジウムが目白押しで行なわれています。年間にすれば、数百になるのではないかと思います。地域の方々も大勢ご参加くださっている。こういうことも、大学という資源をみなさまに活用していただく役割のひとつです。

今日は、東京芸術劇場と立教大学が手を結び、そして地域の方々と一緒に連携を進めていくための、最初の集まりです。今回のシンポジウムをキックオフとして、第二弾、第三弾と続けていきますし、これから具体的な提案を考えていきますので、みなさまのご協力をお願いしたいと思っております。

### 「ESD」とは何か

シンポジウムを始めるにあたって、企画の趣旨をご説明いたします。まず「ESD とは何か」ということです。みなさんの中で「ESD」という言葉を知っている方は、どれくらいいらっしゃいますか？ ……ほとんどいないですね（笑）。「ESD」とは「Education for Sustainable Development（持続可能な開発のための教育）」の略称で、言い換えれば「持続可能な未来や持続可能な社会を創造する力を育む地球市民のための教育と学習」を意味します。2002 年にヨハネスブルグで開催された国連環境開発会議での日本の提案を契機に、2005 年から 2014 年までが「国連 ESD の 10 年」となり、国内外で多様な地球課題的活動が展開されています。

みなさんも「持続可能性」とか「サステナビリティ」という言葉をお聞きになったことがあると思います。ちょうど今日から、南アフリカ共和国のダーバンで「気候変動枠組条約第 17 回締約国会議」（COP17）が始まっていますが、環境面で言えば、世界は今、危機的な状況にあります。もちろん環境だけではありません。私たちの暮らし自体も、平和や人権、貧困など、多様な社会問題が起こり、大変な状況にきている。私もみなさんも、明日生きているかどうかさえわからない。つまり、今の関係——人と人との関係、人と社会との関係、人と自然との関係では、もう持続しないわけです。では、どういう関係なら持続するのか。そうした新しい関係をつくりあげていく、そのための感性、知性、知識、行動力を育てていくのが ESD という考え方です。

日本はこの領域で世界のトップランナーを走っていますが、私どものセンターは、国内の大学で初のESD研究機関として2007年3月に設立されました。国内外のESDに関する活動のハブとしてネットワークを構築し、多様なステークホルダーを通じて、持続可能な社会を主体的に担う装置となっています。

## **劇場と大学の連携事例**

さて、劇場と大学の連携について、これまでにどのような試みがされてきたのか。一部の事例を見ていきますと、たとえば、関西学院大学や大阪市立大学と国立文楽劇場との連携が挙げられます。まさに大阪固有の文化である人形浄瑠璃を扱って研究や教育の対象としようという活動です。

同じような形で、秋田県の田沢湖の近くにある、わらび座という劇団が、秋田県立大学や秋田大学と連携しながら共同研究や人材育成を行なっている。東北という地に根ざした産業、資源、伝統文化を生かしながら地域を活性化していこうという活動ですね。

2015年にリニューアルする長野市民会館が、東京藝術大学と一緒につくっていくという計画も今年から始まっております。他にも、彩の国さいたま芸術劇場と埼玉大学、桐朋学園芸術短期大学とせんがわ劇場（調布市）の連携、また青山学院大学が、渋谷・青山・表参道というエリアの開発も含めた文化発信を社会連携の中で進めています。

## **地域づくりとアート**

次に、地域と芸術文化の連携としては、有名な例ですが、新潟の妻有地区、十日町市で行なわれている大地の芸術祭があります。過疎化が進行している典型的な日本の農村に現代アートを持ち込んでいく。これは東京芸術劇場参与を務められている北川フラムさんがオーガナイズされているものです。私も行ったことがあります。農村に現代アートが根づいているんですね。芸術家と農家の方々が共同作業で作品をつくりあげるというプロセスを経て、まさに「おらが地域のアート」をつくるわけです。

また、瀬戸内国際芸術祭——具体的には直島アートプロジェクトですが、これはベネッセが中心になって運営しています。現代美術による非日常空間の創出、過疎地の活性化、参加・協働をめざすユニークな活動です。

## **地域を創り、人をつなぐ文化の事例**

こうした事例、つまりアートや芸術が地域をどう励ましていくかという問題ですが、全国の地域づくりで、今もっとも有名なのは、鹿児島県鹿屋市柳谷集落、通称「やねだん」と呼ばれている地域です。かつては典型的な過疎の場所でしたが、地元の人が「他に頼らない、自分たちで全部やるんだ」と力を合せ、空き地を活用して芋を栽培し、ブランド焼酎をつくった。また、空き家を「迎賓館」と称して芸術家を呼び寄せています。彼らが、地域の方々と一緒に陶磁をつくったり、いろいろな活動をしています。地元の人には「文化がなくなったら地域は死んでしまう。自分たちが誇れる文化をつくるために芸術家を呼んだ」と言っていました。地域づくりの人材育成研修も行なっていますが、すぐに定員いっぱいになってしまう。全国で最も有名な地域づくりの先進地です。これは非常に成功した事例だと思います。

それから福島県いわき市に、いわき芸術文化交流館アリオスという施設があります。支配人



の大石（時雄）さんは「市民が結び合うこと、助け合うこと、支え合うこと、そういう人生を送っていくための『道具』としての文化施設」と定義しています。震災復興、原発、除染の問題が非常に深刻な場所ですが、この震災を経て、地域における芸術館の役割が鮮明に見えてきたとおっしゃっていました。

## **西池袋について**

では、他地域の諸事例をふまえて、いま私たちがいる西池袋では、どんな活動が行なわれているのか。ざっと挙げただけでも、様々なまちづくりの事業があります。たとえば、豊島区では「まちづくりバンク」という住民たちが提案するボトムアップ型のまちづくりへの助成をしながら、住民参加型の地域づくりに関与しています。また「ゼファー池袋まちづくり」というNPOが地域の中心になって活動の組織化をしています。私のゼミの学生も参加させてもらっていますし、アイポイントという一種の地域通貨の導入や、新池袋モンパルナス回遊美術館、まちなかカフェ、ふくろ祭り……ほんとうにいろいろなことをやっています。

私自身は立教へ来て10年になりますが、住んでいるのはつくば市です。ですから、立ち位置としては「通勤者」です。そういった視点で緑化活動をしたり、飲酒活動と称して地域経済に貢献していますが（笑）、私が見るかぎり、西池袋のイベントは一過性のものが多いような気がいたします。これからは定着した文化をつくっていくことが課題ではないかと思います。

## **東京芸術劇場と立教大学の連携について**

ここまで紹介した事例は、ほとんどが「アート」です。東京芸術劇場と立教大学の連携においては、アートというより、演劇や音楽、そういったものによる協働可能性を考えたほうがいいのではないかと。その上で、地域とどのように関わっていけるのか。

いくつか、後半のパネル・ディスカッションのヒントになりそうなキーワードを挙げてみたいと思います。まずは教育・研究の対象にとどまらない文化の共創・協働。また総長から「地域は第二のキャンパス」というお話もありましたが、屋内から屋外（地域）へという広がりですね。東京芸術劇場も基本的には屋内での創造・発信活動が主ですが、劇場の外で何かできないか。それぞれが、地域に内在する文化的・人的資源の活用法についても考えるべきです。

地域との関わり方としては、地域住民（通勤者、居住者）の参加が第一義になるのではないのでしょうか。私はよく「風土（かぜつち）」という言い方をしますが、通勤者である私は「風」ですね。それに対して、地元に住んでいらっしゃる方は「土」です。こういった「風土の人」たちが、どう融合していくのか。ESD研究センターでも「風土かふえ」という名目でこの数年間、地域の方々どうし、あるいは地域と大学をつなぐ活動を進めてきていますが、今まで培ってきた土壌を発展させる方策を打ち出していきたい。もうひとつは、地域の多様性を生かすこと。池袋には外国籍の方々——とくにアジアの方々が多いため、この多様性を利点として捉えていくことも大事なのではないのでしょうか。

何より、東京芸術劇場と立教大学という単体同士のつながりにとどまることなく、地域を巻き込む形での協働・共創を前面に出すべきだと考えています。そして、何らかの形で池袋西口文化の創造に貢献する。これが今日のシンポジウムの趣旨になります。

以上、簡単ながらイントロダクションといたします。ありがとうございました。

## 基調講演①

# 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり ——大学とのコラボレーションの事例から——

## 福地 茂雄（東京芸術劇場館長）

1934年、福岡県出身。長崎大学を卒業後、57年に朝日麦酒株式会社（のちアサヒビール株式会社）入社。代表取締役社長、会長を経て、現在アサヒグループホールディングス株式会社相談役。芸術文化に造詣が深く、アサヒビール芸術文化財団理事長（2002年～06年）、NHK会長（08年～11年）などを歴任。07年に東京芸術劇場館長就任。公益社団法人企業メセナ協議会理事長、財団法人新国立劇場運営財団理事長も務めている。

みなさん、こんばんは。東京芸術劇場の館長を仰せつかっております福地でございます。平素は私共も池袋西口のお隣組の一員として、みなさまにたいへんお世話になっております。また本日は、立教大学さんのお世話でこういった会を催していただき、たいへん感謝いたしております。

館長を仰せつかって、丸4年が経過いたしました。その前は、アサヒビールに50数年おりましたが、会長時代の3年間はアサヒビール芸術文化財団の理事長も兼任しておりまして、最近の3年間はNHKの会長を務めておりました。アサヒビール芸術文化財団とNHKは企業メセナ活動の「送り手」ですね。NHKは経済的な支援活動をしているわけではありませんが、映像と音楽を通じて、芸術文化の振興に寄与しているという点で、メセナ活動の「送り手」と考えております。その他に、企業メセナ協議会の理事長をしていますが、これは企業メセナ活動の「つなぎ手」と言いますか、企業とアーティストをつなぐ役目を果たしている。そして東京芸術劇場と新国立劇場は「受け手」の分野になります。

ですから、私は「送り手」「つなぎ手」「受け手」の三方から、企業メセナ活動に関わってきました。体系的に芸術文化の勉強をしたことはございません。すべては現場の話ですので、今日は企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり、その中でも、地域と大学と企業というところに焦点を絞って、事例を紹介しながらお話ししたいと思います。

## 企業メセナ活動のこれから：お客様満足型のメセナへ

いつの時代にも「変化」は起こるものですが、とりわけ現代は「三次元の変化の時代」だと思っております。第一に、あらゆる分野で例外なく変化が起こっていて、その間口が広い。第二に、各分野の変化の奥行きがきわめて深い。第三に、変化のスピードが、私たちが今まで経験したことがないくらい速い。そういう「三次元の変化の時代」には、当然ですが、企業による芸術文化支援の形も変わらなければいけません。

では、どのように変わらなければいけないのか。まず「お客様満足型」のメセナ活動に変わらなければいけない。今までのメセナ活動は、大企業やオーナー企業のトップが海外から大型の案件をもってきて安い価格でご紹介する、あるいは美術館を運営するという形のメセナ活動が多かった。近年「企業が果たすべき社会的責任」（CSR：Corporate Social Responsibility）

という言葉の中に、メセナ活動も入ってきましたが、それまでは「社会的責任」というより「社会貢献」——「マーケティング」より「プロダクトアウト」の発想の芸術文化支援活動が多かったように思います。事実、アサヒビールも、1950年代にはカラヤンを呼んでコンサートを開いたり、日比谷公園で「アサヒビール・コンサート」という冠コンサートをした時代がありましたが、それもプロダクトアウト型の芸術文化支援活動でした。これから先は、お客様目線で、地域の人たちもひっくるめたお客様に対して、芸術文化の紹介をしていく形に変わっていくべきなのではないでしょうか。

どんな部門でも「お客様のニーズを充足する形でやっています」と言いますが、それは当たり前前のことであって、今の時代は、商品開発であれ、サービス提供であれ、そして芸術文化支援であれ、お客様の「ニーズ」に沿わないものはありえないわけです。お客様の「ニーズ」は顕在化していく、目に見えるものです。しかし、まだ顕在化していない、お客様の心の中に眠っている何かを引っ張り出す——我々は仮に「ウォンツ」と呼んでいます、それに応えること。そこに、お客様の感激や感動が生まれていく。今の時代は、すべてにおいて、お客様の感動を呼び起こすような「ウォンツ」を探し当てることが必要であって、そういったレベルのメセナ活動が求められるのではないのでしょうか。

### **企業メセナ活動のこれから：パトロン型からパートナー型へ**

次の転換は「パトロン型からパートナー型へ」という変化だと思います。最近、市民の自発的な社会参加型がメセナの世界にも及んできました。とくに芸術文化の「つくり手」や、あるいは「受け手」としての鑑賞者だけでなく、社会と芸術との「つなぎ手」の役割が重視されるようになってきました。現在アサヒビールも、日本全国にある約300のNPOとお付き合いをしております。こうした「つなぎ手」のグループが力を発揮できるように、企業側が支援していく必要が生まれています。つまり、埋もれているものを掘り出すパートナーが求められるというのが、いまの仕事ではないかと思えます。

NPO側から、芸術文化を支える人材育成についての支援、ワークショップ、あるいは鑑賞者のための教育プログラムの実施が提案されるなど、パトロン型からパートナー型へという主役の交代が見受けられるようになりました。私は、パトロン型とパートナー型の共存が望ましいと考えております。たとえば、海外の著名なアーティストを招聘する場合には、企業がパトロンになることで実現可能性が高くなる。今後は、そういった様々な視点が必要になってくるように思います。

### **企業メセナ活動のこれから：地域メセナの重視へ**

地域メセナは、文化活動を通じて魅力ある地域づくりをめざすものです。地域の文化資源——たとえば「お祭り」や伝統芸能を応援したり、お城や伝統工芸を活用して、町を活性化する場合があります。また、もとは文化資源でない資源を文化資源として活用する場合——倉庫や蔵、あるいは移転した土地の建物を文化施設として再生し、新たな使い方を提案することで地域文化に寄与する例が増えています。先ほどご紹介がありました直島のプロジェクトも、そういったことの一例ではないでしょうか。

写真【巻末の当日配布資料P.44-6／番号以下同】は、昨年開催された「あいちトリエンナーレ」のメイン会場のひとつ、長者町という繊維問屋街でのプログラムです。長者町の繊維問屋

の社長さんたちが全面的に活動をサポートし、空き店舗や倉庫を見事なトリエンナーレ会場として変貌させました。地元密着型メセナの事例であります。

文化遺産は貴重な資源ですが、地域ブランドの確立という観点から見ますと、自然も歴史も伝統も、それを保存して、伝承することは大切ですが、それだけで地域は活性化しません。今日の視点から、現在の社会にとってどのような価値があるかを明らかにし、今日の文化を活かすことで、初めて文化遺産は資源として生きてくるものだと思います。生活の中に文化があることで、人と人、地域と人がつながり、文化によって自分の住む地域に誇りを持つことができるという考え方であります。

### **企業メセナ活動のこれから：社会との共感をめざして**

次に、社会との共感をめざす方向への転換であります。社会の共感を得るためには、企画の初期段階から、市民と共同でメセナ活動を実施することも方法のひとつです。

アサヒビールでは、全国の事業場——とくに工場でロビーコンサートなどを実施してきました。それぞれの地域で、地元の人たちの実行委員をつくり、また本番の前後に市民向けのワークショップも実施しています。こういった、きめ細かなコミュニケーションを図ることで、文化の理解を深め、感動を共有しようというわけです。

この写真【P.45-7】は、立教大学のオルガニストの崎山裕子さんにご出演いただいた、第81回アサヒビールのロビーコンサート「ポジティブ・オルガンで贈るクリスマス・コンサート」（2004年12月）です。アートマネジメントを学ぶ学生と社員、アーティストが共同でクリスマス・コンサートを企画しました。大学のカリキュラムに「アートマネジメントの実践」を組み込んでいた早稲田大学、昭和音楽大学とも連携した事例です。

企業経営におけるメセナ活動が、その企業のコーポレートブランド確立の一助となるためには、メセナ活動が社会からの共感を得なければなりません。私は、共感とは「信頼」だと思っております。たとえばアサヒビールの場合、メセナ活動をやればスーパードライの売上が増える、というわけではない。メセナ活動自体が、商品ブランドと直接結びつくわけではありません。しかし、企業による芸術文化支援活動を続けていくことで、「あの企業はいいことをやっているな」という好感に結びつく。それが、その企業のコーポレートブランドに引き上げてくれる。そのためにも、社会の共感を得なければいけないと考えています。

現在、株主総会が非常に厳しくなっておりまして、中には「なぜ企業が関係ない芸術文化の支援をしなくてはいけないのか」といった考え方もあります。アサヒビールは、京都の大山崎山荘美術館に、年間数千万円の支援をしています。とくに海外の投資家からは「そんな金があるなら配当に回せばいい」と言われてしまう。しかし、配当に回すということは短期的な問題であって、中長期的な目線に立つと、何か新しいことをやったときに「この商品は知らないけれど、アサヒビールなら間違いない」といった信頼、社会的な共感を得ることができる。そのためにも、メセナ活動を地道に続けていくことが大事だろうと思っています。

### **アサヒビールの事例から：メセナ活動のコンセプト**

ここからはしばらく、アサヒビールの事例を交えてご紹介します。

アサヒビールのメセナ活動は「未来」「市民」「地域」という三つのキーワードのもとに運営されております。これは、経営理念、企業行動方針、アサヒグループCSR基本方針などに由来

するものです。まず「未来」というコンセプトのもとに、若手アーティストの発掘、育成を中心とした活動を展開しています。次に「市民」というコンセプトのもとに、市民が主体的に参加できる環境づくりに寄与しています。そして「地域」というコンセプトのもとに、文化振興による地域の発展に寄与しています。

そうしたコンセプトのもとに、2002年からアサヒ・アート・フェスティバル（AAF）を全国各地で展開していき、毎夏、全国のアートNPOや市民グループと共同開催しています。この図【P.45-9】は、AAFのネットワークでつながる活動を日本地図に落とし込んだものです。11月20日に、今年のアート・フェスティバルの成果発表会を、吾妻橋のアサヒビールにある本部で実施し、全国から26のNPOの方々にご参加いただきました。

### **アサヒビールの事例から：大学との連携**

この中に、大学と連携して取り組む、地域密着型企画があります。

まずは、京都市立芸術大学の学生さんが中心となって、アーティストや地元住民の方々と一緒に展開しているプロジェクトです。大学のある西京区大枝には、京都第二外環状道路が計画されているエリアがあります。高速道路が完成するとなくなってしまう、その風景の「今」と関わるアートプロジェクトを展開しています。

大学の授業でなく、大学の講師も勤めるアーティストや学生、地元住民が一緒になって、アートにより、地域の原風景に寄り添い、その記憶を残していくためのプロジェクトとして、AAFと主体的にネットワークを結んでいます。全国にたくさんの実践事例をもつAAFに加わることで生まれる様々な出会いは、学生たちのステップアップにもつながっています。

次に、大分県別府市で、3年に一度「混浴温泉世界」という現代芸術の国際フェスティバルを開催している「BEPPU PROJECT」の取り組みにも、大学と地域の連携事例があります。これは、男女のお風呂の混浴ではありません（笑）。いろいろな芸術文化を一緒にやろうという意味での「混浴」になります。

写真の左上【P.45-11】は、地域の工芸品やアーティストの作品を取り扱うお店の外観、左下【同前】が内部（2階）でワークショップを開催している様子です。後方に見えるのは、アーティストのマイケル・リンさんによるふすま絵の作品。ここは、築100年の長屋の一室を大家さんのご協力のもと、アーティストのマイケル・リンさんと、地元の建築家とのコラボレーションにより再生した物件です。その耐震基準を満たすための調査研究を、大分大学福祉科学研究センター「福祉のまちおこし調査研究事業」の一環として実施しました。

また右の写真【同前】は「まちなかカフェ」の様子です。コーヒーを飲みながら、絵本から話題の本まで楽しめるブックカフェとして、立命館アジア太平洋大学（APU）が運営しています。地域の方々のコミュニティカフェとしての使用もあります。お互いの研究領域の重なるところでパートナーシップを組むことで、双方の主体性が途切れることなく、活発な展開につながっているわけです。

さらに、当社が直接関わったプロジェクトもあります。2007年のアサヒ・アート・フェスティバルでは、京都の大山崎山荘美術館で、京都造形芸術大学との連携プログラムを実施しました。大山崎山荘美術館は、京都天王山の中腹、風光明媚の地に建っています。主なコレクションとして、河井寛次郎、濱田庄司、バーナード・リーチらによる民藝作品や、モネの「睡蓮」などを常設展示しております。

写真【P. 45-12】は、当時京都造形芸術大学の教授もされていた演出家の宮本亜門さんと、大学の学生さん7名による、現代のお茶会をつくるプロジェクトの様子です。「黒ハ古キココロ」という千利休の言葉と、二畳という空間の意味を問い直すことをテーマとしたもので、宮本亜門さんのリードで学生7名がアイデアを絞り、彼らが制作した黒い茶室で茶会を開きました。京都造形芸術大学には、大山崎山荘美術館の展示を毎年1回、お願いしております。学生さんが自分たちの企画で美術館の運営をしてみるという活動です。

また、京都造形芸術大学のアートプロデュース学科のカリキュラムの一環として、本物の作品を素材に、小学生向けワークショップを企画し、現場で運営することの実践も行ないました。写真【P. 46-13】は大山崎小学校の授業の一環として行なったワークショップの様子です。超高精細デジタルカメラで、同一サイズのリアルなモネのパズルを造形大がつくり、小学生が美術館で本物のモネの「睡蓮」を鑑賞した後に、造形大の学生のリードで、パズルを組み立てます。難しいパズルを、友達と組み立てながら、じっくり作品をみること、みんなで力を合わせて完成させることを体験しました。パズルの完成後、もう一度実物の絵を前に、大学生が小学生から感想、コメントを引き出しながら、ギャラリートークを行ないました。地域に開かれた美術館でありたいという思いと、学生により実践的な活動を主体的に取り組ませたいという思いが合致した事例です。

同じく、大山崎山荘美術館における、神戸大学発達科学部との共同プログラムでは、親子向けワークショップ「モネさんのいろいろな色世界に挑戦！」を開催しました。モネの絵を鑑賞した後で、庭で秋の色を探し、パステルを使った色遊びを親子で行なうといったプログラムでした【P. 46-14】。

こうした大山崎山荘美術館の取り組みは、2007年メセナ・アワードで「大学や住民との協働により、地域とともに成長する美術館活動」として総合的な芸術振興活動を評価いただき、文化庁長官賞をいただきました。

## **アサヒビールの事例から：「企業文化」における協働事例**

また、少しテーマを広げて「企業文化」における協働事例もご紹介します。

大阪の梅田駅から徒歩5分という立地にある大阪富国生命ビルの4階で、お客様との双方向のコミュニケーションを通じて、生活者の豊かなライフスタイルに関する研究とサポートを実践し、地域の活性化に貢献する拠点として、大阪大学とともに「アサヒラボ・ガーデン」を今年の4月に開設しました。

大阪大学とアサヒグループホールディングスは、「食」「健康」「ライフスタイル」「社会」「コミュニケーション」などをテーマに、共同研究や人材育成を推進していく産学連携協定を締結して、プログラムを共同開発しています。親子を対象としたプログラム、シニア向けプログラム、子育てに役立つような親御さんに向けたプログラム、女性向け、男性向けなど、多彩なプログラムを開発、実施しています。

左の写真【P. 46-16】は、同じ「アサヒラボ・ガーデン」の取り組みで、今年10月に共同開催した公開研究会の様子です。大学や企業において、研究内容を社会に伝えることの意義やアウトリーチ活動をいかに評価するべきかといった、お互いの研究環境を振り返り、現状や今後の課題について議論しました。11月には大阪大学の学生が茨城県守谷の研究所に来て、研究者へのインタビューも実施しました。それが右上の写真【同前】です。

「アサヒラボ・ガーデン」では、アサヒグループの研究者などが、セミナーやワークショップの開催を通じて、お客様との双方向コミュニケーションを図り、新たなモノづくりと地域の活性化に貢献することを目標にしています。

### **企業メセナ協議会の顕彰：企業・大学・地域による事例**

これからの3件は、企業メセナ協議会の取り組みのひとつである顕彰事業で紹介されました「企業」「大学」「地域」という三つのキーワードで取り組んだ事例です。

まず、京阪電鉄、大阪大学、地元アートNPOが連携して運営しているものです。京阪電鉄が中之島の地下に乗り入れていく、中之島線のなにわ橋駅の地下に、アートの拠点をつくりました。駅の建設段階の2006年から、都市空間において駅が持つ可能性を模索する社学連携プロジェクト「中之島コミュニケーションカフェ」を実施しました。駅の建設現場でのトークやファッションショー、ダンスパフォーマンスを実験的に行ない、話題を集めました。路線の開業以降は、なにわ橋駅の地下1階のコンコースに常設の活動機関「アートエリアB1」を開設し、大阪大学とNPO DANCE BOXの協働によって、駅でのアート・プロジェクトが本格的に始まりました。「停車場」としての駅から「コミュニケーション空間」としての駅へというコンセプトをもとに、大学の「知」と、アートの力、そして地域の活力を結集し、なにわ橋駅が中之島エリアの文化・芸術・知の創造と交流の場となることをめざして取り組んでいます。これも2009年のメセナ・アワードで文化庁長官賞を受賞した取り組みであります【P.46-17】。

次の「第6回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館」は、私からご説明するまでもありませんね。東武百貨店、立教大学、豊島区、NPO法人ゼファー池袋まちづくりが実行委員会を設立して取り組まれた事例です。今年の活動内容は、特別企画として、東武百貨店で大久保作次郎展、西口公園で「ビックフラッグきずな」、まちかどこども美術展、トークショー「グローバル演劇都市池袋！」、石巻市渡波小学校の子どもたちがつくった復興のオブジェ展「ワタノハスマイル」といった取り組みをされたと同っております【P.46-18】。

そして、公共・民間・大学の連携をテーマに立ち上げた、柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)の取り組みです。東京大学、千葉大学、柏市、三井不動産、柏商工会議所、田中地域ふるさと協議会、首都圏新都市鉄道の七つの構成団体により共同運営されています。関係公共団体や、各種専門企業が協力団体として加わり、フラットかつ柔軟な連携により、さまざまな取り組みが行なわれております【P.47-19】。

### **むすび：「心」と「かたち」**

東京芸術劇場は、来年9月には新しく変身した姿を、みなさまにお目にかけることができます。その新しい東京芸術劇場、立教大学、そして西池袋のみなさまとが一体となって、まさに「池袋西口モンパルナス構想」の実体をつくりあげることが大きな課題だと思えます。そのためには、さまざまな組織や委員会といった「かたち」をつくることも大切ですが、その「かたち」に「心」をこめる。池袋西口の開発・発展に携わるすべての人たちの熱い「心」が必要でしょう。東京芸術劇場の「変身」と同様に、池袋西口の「変身」を希望してやまない一人でございます。

以上、短い時間ではございましたが、私からのプレゼンテーションを終わらせていただきます。ご静聴いただきありがとうございます。ありがとうございました。

## 基調講演②

# 東京芸術劇場と立教大学の連携について

——劇場の歴史・劇場の役割・大学について・大学と地域／劇場——

## 高萩 宏（東京芸術劇場副館長）

1953年、東京都出身。東京大学在学中に劇団「夢の遊眠社」設立に参加。91年英国で開催されたジャパン・フェスティバル舞台芸術部門ディレクターを務め、92年コロンビア大学留学。パナソニック・グループ座支配人、世田谷パブリックシアター制作部長を経て、2008年に東京芸術劇場副館長就任、多彩な劇場改革を行なっている。07年に多摩美術大学客員教授就任。立教大学文学研究科比較文明学専攻兼任講師。著書に『僕と演劇と夢の遊眠社』（日本経済新聞出版社）。

こんばんは。東京芸術劇場副館長の高萩と申します。今日は、劇場の歴史と役割、大学の役割、地域における劇場、大学の将来といったお話をさせていただきます。連携協定に関して、じつはまだ立教大学との間で具体的な話が進んでいないため、即効性のある話にはできないのですが、これから劇場と大学が協働するために、どんな可能性があるのかを考えていきたいと思えます。

最初に自己紹介をさせていただきます。私は、1970年代に大学に入りまして、東京大学の中に、野田秀樹さんと「夢の遊眠社」という学生劇団をつくりました。大学では劇団の運営について誰も僕に教えてくれなかったものですから、少し大きくなってからは、劇団四季など、他の劇団のやり方を見ながら考えていました。大学の中でも、学生劇団がどうやったら演劇で食べていけるのかは教えてくれない。大学の先生からは「こんなのは演劇じゃない」と言われたりもしました。

そんな中で、ラッキーだったというか、野田さんに才能があったからか、非常に大きな劇団になりました。代々木体育館で興行をして1日に2万7000人くらい集めたり、学生劇団出身ながら3度くらい海外に行かせてもらったりすることができた。今でいう企業メセナ——1980年代当時は「冠イベント」と言っていましたが、民間会社から年間1億数千万円の資金援助をいただくような、非常に珍しい劇団だったと思います。それから紆余曲折あって、私自身、演劇を仕事としてここまで来たという不思議な状況です。

## 劇場の誕生と歴史

まずは、劇場についての話から始めます。演劇は紀元前5～6世紀のアテネで始まります。ちょうど王制から民主制に変わっていく頃、最初は吟遊詩人による物語や唄が行なわれましたが、やがて対話によって物語が進行していく「演劇」が起こった。その中でエウリピデス、ソフォクレスといった劇作家が生まれるんですね。当時の複雑な社会を理解するのに、演劇という形式が非常によかったと言われていました。

当時のアテネでは、お金を出す者、演じる者、芝居をつくる者、観劇する者とに分かれていて、すべての市民が演劇に参加することを求められました。仕事を持っている者には劇場へ来るための日当が払われたと言われるくらい、劇場で演劇と一緒に体験することが、アテネの市



民にとっての義務だったわけです。演劇を通して、市民が共同体の一員であることを認識する場が、彼らにとっての劇場であり、ポリスの運営にとって絶対に必要な場所だったのだと思います。

ルネッサンス時代になって、土間に一般市民、2階の客席に貴族階級、真ん中で王様が見ているという劇場が出現します。劇場の中に世界を表現するという思想が芽生え、シェイクスピアが「演劇は世界を映す鏡である」と言ったように、メディアとしての劇場が発達していくわけです。その後もヨーロッパにおいて、劇場は常に町の中心に位置し続けました。第二次大戦後の復興時に、まず教会と劇場がつくられたと言われるくらい、市民社会にとって、社交の場であり、教育の場であり、娯楽の場だったのです。

一方、日本の劇場もユニークな発展をしましたが、木造だったり、神社仏閣の勧進のためだったり、火事や地震の関係もあったと思うのですが、常に仮設的なイメージがつきまとっています。町のシンボルとしての劇場という発達の仕方はしなかった。明治維新を経て、日本の公共劇場は、政治のための集会施設として始まります。その後、公共の貸出施設として機能することで整備が進むわけですが、自ら創造・発信事業を行なうという動きにはならなかった。

それが、1980～90年代になって、日本でも社会の中での文化芸術の価値を見直そうということで文化政策が始まりました。2000年代に入ってから、芸術団体へ公的な資金援助を出し続ける方法が問われるようになり、公共劇場の、地域文化の創造・発信を担う機能が注目されだしたところです。同じような、公的援助や地域が支える劇場運営について研究する「アートマネジメント」といわれる研究分野が確立されて、欧米でも日本でも共有されるようになっていきます。

## **劇場の役割**

私は劇団から演劇活動を始めましたが、劇団は、自分たちの好きな場所を選んで公演できます。しかし、劇場の大きな特徴は、建った場所を動けないということだと思います。劇場として様々なプログラムを上演するとき、誰に、何を、どのように見せるのか、それを誰のお金でやるのか、資金ソースと対象の間で常に矛盾が起こります。そこで、私が劇場の役割について考えるときには、劇場を中心にいくつかの同心円——半径 500m、5km、50km、500km、5000km、5万 km——を描いてみるんです。

たとえば、半径 500m だと、町会や商店街、つまり街角から劇場を見ることができる範囲です。ただ、その範囲の中の方々すべてに、実際に劇場に来ていただくことは難しい部分もありますので、みなさんから「劇場があつてよかった」と思ってもらえること自体が大事なのかなと思っています。いちばん小さい地域の方々との関係をどうしていくかという問題です。

次に半径 5km の範囲を考えますと、豊島区——地方自治体がすっぽり入るくらい。ちょうど小中学校の義務教育の責任がある地域かと思います。劇場が、教育に対してどのように影響を与えることができるのか。生徒さんに劇場へ来てもらう、あるいは劇場から学校にアーティストを派遣するような関係ができるといいでしょうね。そこで何か刺激を与えたり、新しい表現活動をしたり、地方自治体や地域の教育機関と連携して劇場の役割を担っていくことが必要ではないでしょうか。

半径 50km というのは、東京都で言えば首都圏、マスコミの届く範囲です。大量動員を要する演目や、前衛的・先鋭的な芸術活動をすることがあれば、この範囲に情報を与えたり、その

中の人たちに支えられることになります。

もう少し広く、半径 500km になると、日本を少しはみ出してしまおうのですが、ひとつの国の範囲と考える。国家や、国語（日本語）に革新を与えられるようなもの、日本の伝統文化に対して新しい視点を与えられるような演目を上演することで、国を代表するような文化をつくっていく。その場合は当然、国のお金を使って、何かをすべきだろうと思います。

そして、半径 5000km を考えると、タイやシンガポールくらいまでの距離です。アジア太平洋地域の中で何ができるか。つまり、西洋とは異なる、アジアとしての舞台芸術を上演していくわけです。

最後に、半径 5 万 km になりますと、地球の直径が約 1 万 2700km ですから、宇宙に飛び出してしまおう。狭い地域に活動を限定する劇場もあるかもしれませんが、東京芸術劇場は、それくらい大きな範囲まで視野に入れて、ある演目は地球規模、ある演目はアジア規模、ある演目は日本の文化を支えるようなもの……といったことを考えながらやっています。

劇場の役割を考えるために、もうひとつ別の補助線を引いてみましょう。先ほどは劇場を中心に同心円を描きましたが、今度は、その中心から垂直に棒を立てて、まわりに年齢層を貼り付けていく。そうすると、いちばん下のほうは 0 歳児から未就学児、そこからだんだん年齢が上がって、小中学生、高校生、大学生や 25 歳以下の若者層、そして大人の厚い層があり、シニア層まで、人口分布図のようなモデルをご想像いただけるかと思います。劇場をとりまく地域の、あらゆる年齢層に参加、鑑賞してもらい、劇場はそれぞれのライフシーンに合わせたプログラムを提供しなければならないという考えです。

この二つ、劇場を中心とした同心円と、その中心から上に延ばした垂直線のまわりの年齢別の人々を組み合わせると、立体的な紡錘形の劇場モデルができあがります。これがみなさんに支持されて、独楽のように回っていけば、劇場としてもうまく運営していけるわけですが、高度資本主義社会において、劇場は工場制手工業のようなもので、拡大再生産ができないという致命的な問題がありますから、お客様からのチケット収入だけでは活動できない。当然、公的な資金を必要とする。というところで、では誰が運営を支えていくかが常に問題になっています。東京芸術劇場も、東京都や国に支えられながら運営していますが、けっして潤沢な資金ではない。大きなことや新しいことをやろうとすれば、必ず資金が必要になるので、劇場も資金獲得に関して、大きな問題を抱えているわけです。

## **教育の役割の変化**

ここで少し、大学教育について考えてみます。私たちは今、情報革命の真っ只中にいるわけです。人類史の中でも、数千年かかった農業革命を経て、17 世紀の終わりから産業革命が始まった。そうした革命の中にいる時は、おそらく自分の時代が、その前後でどれだけの変化があったかということに気づかない。1990 年代から始まった情報革命も、私たちの考え方や世界観を大きく変えていると思うんです。

もっとも影響を受けたのは、教育分野でしょう。従来は、先行世代が得た知識、生活の知恵を、後進世代に効率的に受け渡していくことが、教育の役割だったと思います。ところが、知識に関しては、情報革命によって、誰でも簡単に受け渡せるようになってしまった。わざわざ人を集めて教える必要がない。その中で、どのような教育を与えていくかが問われているわけです。もちろん、一定の知識の習得は今でも必要ですが、これからの教育はむしろ、他者との

コミュニケーション技術を習得すること、社会の仕組みの中でいかに自己実現し、精神のバランスを保つかを学ぶことが主流となっていくのではないのでしょうか。

私が大学に入った 1970 年代は、大学進学率が 25% くらい、20~30 万人が大学生になっていた。それが右肩上がりに増え続け、2000 年で 40%、2010 年で 50% になっています。かつて大学が担っていた、指導者層をつくるような役割とは異なる、また従来大学を経なければ実現できなかったことをめざすのではない学生が、大学の中に存在し始めている。そして、大学はそれに応えていかなければいけない状況になっている。つまり、世の中の若者の半分が占めている大学生を、どう世間へ送り出していくのかという問題があります。

ここ 20 年で、大学自体が非常に大きくなりました。教職員の方々、学生も含めて、それぞれの役割を考え直さなくてはいけない時期にきている。従来からの役割である専門的、あるいは先端的な研究は今でも絶対に必要です。しかし、それ以外の人たちにとって、大学がどういう場であるべきなのかが問われているのだと思います。

## **西池袋という町の運営**

阿部先生から「ESD」というお話がありましたが、西池袋という町も、持続可能な形で運営されているようには思えません。池袋西口の商店街も、このまま順調に世代交代が進行していくようには見えないわけです。それから、震災を経て、池袋は地域の人たちだけが買い物をすればいい町ではないということに気づかされました。つまり、毎日乗降している 260 万人のうちの何割かが、有事には池袋に溢れ出してしまうかもしれない。彼らの安心・安全を支えなければいけない。そのときに、町としても、新しい役割を担わなければいけないのではないのでしょうか。

もうひとつの池袋の特徴として、他の町と比べて大きな利害関係者がいない、ということが挙げられます。たとえば、渋谷には東急がありますし、新宿でも大きなデパートが町を支えている。ですが、池袋自体には、はっきりした大きなステークホルダーがいないのではないかとも思うんです。

そうした中で、改めて「現代」という時代を考えてみますと、持続可能な世界を実現するためには、非常に危うい状況にある。先日、世界の人口が 70 億人を突破したと報道されましたが、2050 年には 90 億人を超えると言われていています。20 世紀初頭には約 10 億人だったことを思うと、危険な増え方です。資源も枯渇し始めていますし、二酸化炭素の問題もある。世界の持続可能性については、ほとんどの人が否定的になっているわけです。

こうした状態において、現実の社会を考えると、芸術活動は単に精神を癒すというものではなく、社会と少し離れたところから、社会の課題を考えていくためのモデルとしての存在意義が見えてきます。科学や宗教も、現実とべったり密着するのではなく、ちょっと離れて俯瞰的に現実の問題を見ることが特徴です。大学は科学的なことを考える。また劇場も芸術を扱うことで、現実そのものではないモデルを考える。そういう視点が大切になってくると思います。

## **大学と地域、劇場との関わり**

そこで、池袋西口における大学と地域、劇場を考えると、それぞれ目の前に大きな問題を抱えているわけです。大学としては、増えた学生をどうするか、情報革命の中で新しい教育をど

うしていくかを問題にしなくてははいけない。地域としても、安心・安全をどう確保するかを考えなくてははいけない。劇場としても、創造的な活動をしようと思ったら、自分たちのチケット収入だけでなく、公的な資金を必要としなくてはならない。

今までは、大学も劇場も地域も、閉じられた組織の中で別々に存在していました。学生は地域に対して、ボランティアやアルバイトという立場でしか関わらず、すでにできあがった組織に影響を与える存在ではなかった。劇場や町も、お祭りやイベントを開催するときには、学生をあてにするより自分たちで行なってきた。お互い独立して存在していたのが、従来の関係だったと思います。

画期的な特効薬があるわけではありませんが、先ほどの劇場運営モデルを考えると、立教大学には毎年 3000 人を超える学生が入っていき、4 年経てば 3000 人が様々な地域へ巣立っていく。その人たちとの関係をうまく考えれば、彼らが持っている知恵やエネルギーを、劇場や町の運営にも活用できるのではないのでしょうか。

従来、立教大学は「池袋にある大学」ということについて、あまり強くアピールしてこなかったし、じつは東京芸術劇場も「東京の劇場です」とは言ってきましたが、たまたま池袋にあるような形で「池袋の劇場」ということは前面に出してこなかった。しかし、大学も劇場も建っているこの場所から引っ越すことはできないのですから、もっと自分の建っている場所との関係について考えるべきなのです。これからは、もう少しゆるやかな関係というか、劇場にせよ町にせよ、何か事業を行なう場合、学生が参画できる居場所をつくっていく。その企画から一緒に活動できれば、新しい関係が生まれてくるかもしれません。

次のパネルディスカッションの話題になればと思うのですが、大学の資源について考えたときに、まず思い浮かぶのは、この建物ですね。ふだんは授業をやっていますが、それ以外のとき——夜間あるいは夏休みや春休み——の活用法を充実させる。それから、東京芸術劇場は世界に冠たるパイプオルガンを持っていますし、立教大学にも複数のパイプオルガンがある。そういう形で何か一緒に事業ができないか。また、町との関係で言えば、いま池袋西口公園を劇場広場として活性化できないかという議論が行なわれています。

それぞれ、劇場、町、そして大学も新たな転機を迎えている中で、こういう機会に何か共同制作ができないかと思っています。よろしくお願いします。

## 西池袋の持続可能な地域づくりにおける

### 〈劇場×大学〉による協働展望

パネリスト：福地茂雄、高萩 宏、吉岡知哉、阿部 治（司会）

#### 「西池袋」という地域について

**阿部** では、パネルディスカッションを始めます。今日は大盛況でして、東京芸術劇場と立教大学、また芸術文化と地域の連携について関心をお持ちの方がたくさんご参加くださっています。フロアからもコメントやアドバイスをいただきながら、みなさんを巻き込んだ形で進めていきたいと考えています。ただ、21時には終了させないといけませんので、少し駆け足になるかと思いますが（笑）、よろしく願いいたします。

前半の基調講演では、まず福地さんから全体の方向性ととも、非常に具体的なお話をいただきました。とくに「未来」「市民」「地域」という原則的なコンセプト、文化に関わるために必要な視点を提示していただきました。続いて高萩さんからは、巨視的、あるいはトレンドと言いますか、そういう中で劇場を同心円的に見ていくということ。さらには学生の参加についてのアイデアもいただきました。

お二人のお話をふまえながら議論を進めていきますが、2点ほど、私から問いかけをいたします。ひとつは、今日のテーマである「西池袋」という地域について、パネリストの方々が、どのように捉えているか。つまり、私たちはこれから「西池袋」を共通のフィールドとして活動を展開していくわけですが、これを今どのように捉えていて、これからどのように捉えていったらいいのか、という問題です。立教が築地から池袋に移ってきたのは……

**吉岡** 1918（大正7）年ですね。

**阿部** ということは、約100年間、この地にあるわけです。そこでまずは、立教大学と西池袋について、吉岡さんから口火を切っていただきたいと思います。

**吉岡** 立教大学は、非常に 트렌ディな大学というイメージを持たれている方が多いと思うんです。今は女子学生が52%を占めていますが、華やかで、モダンな大学だというイメージがある。昔から大学名の下に「ボーイ」がつくのは「立教ボーイ」と「慶應ボーイ」だけです。戦前からそうだったらしいんですが。

何を言いたいかと申しますと（笑）、立教大学のある池袋は、東武東上線や西武池袋線の起点として、東京の西の方面に開かれている。と同時に、下町にも開かれているんですね。山手線の環で見ると、なんとなく新宿、渋谷とのつながりだけで捉えてしまいがちですが、じつは上野や浅草のほうともつながっていて、立教生も下町の人が多いんです。それが立教の卒業生の活発な活動にも結びついている。そういう意味で、重層的な文化を持っているのが、立教大学あるいは池袋の特徴だと、私は思っています。来年、副都心線が

開通すれば、横浜方面とも直通になりますから、より多彩な要素が加わるわけです。

それから阿部さんのお話にもありましたが、外国人、とくにアジアの人たちが多く。これからの大学や地域のありかたにとって重要な「多様性」の創出——企業でもダイバーシティ・マネジメントの重要性は夙に指摘されていますし、演劇ひいては芸術にとっても重要だと思いますが——その点でも、他の地域より可能性を秘めているように思います。

もうひとつは「広場の復権」ということですね。たとえば、渋谷にはハチ公広場がありますが、辛うじて待ち合わせができる程度。新宿も、私が高校生の頃は新宿駅西口広場でいろいろ催されていましたが、今では人が集まって何かできるような場所ではなくなっています。それに比べて、池袋の西口は高野（之夫）区長のご尽力で整備されましたし、東京芸術劇場と、その前に広い空間がある。駅から降りてすぐに、あれだけの空間がある場所は、あまりないのではないのでしょうか。

**阿部** 立教ボーイ（笑）。立教大学と池袋の多様な可能性を、広場を含めてお話しいただきました。私もよく通ってきますが、たしかに西口公園は存在感がありますね。その横にある劇場として、西池袋をどんなふうに捉えていくか。福地さん、いかがでしょうか。

**福地** 私は、大学を出るまでの 22 年間で九州で過ごし、アサヒビールに入ってから 20 数年——ようするに人生の真ん中の時代は大阪が多かった。この 20 数年は東京にいますから、さまざまな面で各地を見てきたわけです。いま住んでいるのは文京区ですし、仕事が東京芸術劇場ということもあって、池袋には頻繁に出てくるようになりました。やはり池袋と言って最初に思いつくのは立教大学ですね。総長がおっしゃったように、私が学生時代、立教大学と言えば「立教ボーイ」でした。じつは、今日ここへ来る前に、アサヒビールの若手社員に「立教ボーイって知ってる？」と聞いたのですが、女子学生のイメージのほうが強いようで、いまの人たちは知らないんですね（笑）。

いずれにせよ「大学の町」というイメージは非常にいいと思うんです。これをうまく生かしていく。また、JR、地下鉄、東武、西武が入っていて、こんな交通至便なところはありません。それから、私は豊島区立中央図書館をよく利用するので、東口のほうに行くことが多かったのですが、以前から東京芸術劇場はすばらしいと思っていました。まさか自分が館長になるとは考えもしませんでした（笑）。

**阿部** ありがとうございます。立教ボーイは死語というお話もありました（笑）。では高萩さん、いかがでしょうか。

**高萩** 僕は、世田谷で育ったものですから、はっきり言って、池袋のイメージは悪かったですね。子供の頃は「池袋へは行くな」と言われていました（笑）。こんなことを言っているかどうかわかりませんが、立教がこんなに池袋駅の近くにあるとは、東京芸術劇場の副館長になるまで知らなかったんです。たぶん、それは僕だけではないんじゃないかな。

**阿部** まさにおっしゃるとおりでして、私の職場には、色々な人が来てくれるのですが、初めての方が多くて、実際みなさん「こんなところにあったんだ」と言う。もしかしたら、東京芸術劇場もそういう部分があるのかもしれないね。

**高萩** ええ。だからこそ、池袋と東京芸術劇場と立教大学が一緒になることで、何か変わる可能性はあるかもしれない。立教大学は池袋にあって、池袋を立教大学が変えたということになれば、かなりインパクトがある。東京芸術劇場も同様です。先ほども少し話しましたが、池袋に大きなステークホルダーが見えないことは重要で、たとえば「池袋をこうしち

や困る！」と言う人はいないのではないか。町の人たちも独立しているので、一緒に何かを変えていこうと呼びかければ、実現できるような気がしています。そして、そうなったときに、公共系が手を出しやすいのかなと思うんです。豊島区が池袋の西口を何かしたとしても、それ自体がどこかの企業を援助しているようなことにはならないだろうと。

**阿部** 今日は高野区長がいらっしゃっていますし、池袋のステークホルダーというべき方々も大勢いらしています。ただ、とくに西口はメインのステークホルダー——いわゆる権力者みたいな（笑）、そういう存在は見えない。これはいいことですよ。

**吉岡** 豊島区観光協会の齋木（勝好）さんもお越しくださっていますね。齋木さんが、新宿、渋谷とは違う、池袋の商店街の特徴として、非常に大事なことだと常々おっしゃっているのは、みなさんが「住んでいる」ということです。つまり、新宿や渋谷の駅前ビルは完全に貸ビルで、持ち主は別の場所に住んでいる。本当の意味での商店街は成立していないわけです。それに比べて池袋は、駅の近くに住んでいる人が非常に多い。池袋におけるステークホルダーは、けっして大きくはない、逆に言うと細分化されているのかもしれませんが、生活と重なっていると思うんです。そういう「地元」を持っていることが、池袋の強みではないでしょうか。たとえば、ヨーロッパの都市では、当たり前ですが人が住んでいて、そこに劇場がある。大学もそうです。そのことは、先ほど申し上げた可能性の重要な要素かと思います。

**福地** ひとつの印象ですが、仕事柄、全国各地の都市に行きますけれども、今はどんな都市に行っても、シャッター通りが多いですよ。町の真ん中の店がシャッターを下ろしていたり、夜8時になったらみんな店を閉めて真っ暗になっていますが、池袋でそんなことはありません。それから、人が少ない、若者が少ないと言われている中で、これだけ大学があって、若者の多い町はない。地方都市が抱えている大きな問題を、池袋は逆に利点として持っているわけで、こんな羨ましい町はありませんね。

**阿部** みなさんにお話しいただいたことは、どれも池袋の特徴です。これを高く評価するか、あるいはそうでもないとするか、見方はいろいろだと思いますが。たしかに生活の場として関わってらっしゃる方が多い。池袋の地域づくりは「ゼファー池袋まちづくり」というNPOがオーガナイズされていますが、活動されているみなさんは、池袋に住んでらっしゃるんですよ。吉岡さんが指摘されたとおり、すごいことじゃないか。また福地さんがおっしゃったように、人が多い。私は、あまり多くないほうがいいのでは……などと思ってしまうのですが（笑）。地方都市と東京の池袋という差異は無視できないにせよ、これもある意味ではメリットになりますね。繁華な都市環境と生活・居住空間が共生しているわけです。

今までは、立教も芸劇も「池袋」ということを前面に出してこなかった。もちろん立教は全国区、世界区をめざしているわけですが、地域の大学ということを一方向では謳っていかなければいけない。大学の責任として、地域にどう関わっていくか、持続可能な地域づくりにどう関わっていくか。これが問われているわけです。芸劇もそうですね。高萩さんの同心円のお話のように、東京、世界を相手にしていくけれど、ベースは池袋なんだということを訴えていく。これを共通認識として、話を進めていきたいと思います。

## 〈東京芸術劇場×立教大学〉の協働ビジョン

**阿部** 協定締結の経緯として、立教の入学式を東京芸術劇場大ホールでやらせていただいている（2006年度～）関係で話が出てきたわけですが、これはそこにとどまる問題ではありません。協定の締結はあくまでひとつのきっかけで、今後一緒にタッグを組んで、持続的に行なっていくべき事業です。そのときに、どのような協働のビジョンを描き得るのか。先ほど福地さんから、メセナを通じた企業と地域、あるいは大学との連携に関する事例の紹介がありました。また高萩さんからは、毎年3000人、4000人出てくる学生が社会を学ぶ場として地域を活用していくという、すばらしいアドバイスをいただきました。

そこで、吉岡さんには当事者として、大学が劇場や地域との新しい関係を構築していく中で、学生や教職員がどのように参画できるのか、今のお考えをお聞かせいただきたいと思います。

**吉岡** 入学式の他に、立教が芸劇にお世話になっている重要なことは、毎年12月に行なわれるメサイアの演奏会（1991年〔第30回〕～）です。音楽も含めて、様々な課外活動で劇場を利用させていただいているわけです。昔は「正課」と「課外」を分けて考えることが多かったのですが、最近は一——少なくとも私は、学生生活における課外活動は、非常に重要だと思っているので、学生の、授業に出ている時間以外の生活の場を広げていきたいと思っています。

このことに関しては、協定の話が出る以前、高萩さんが副館長になった頃からお互いに話していたのですが、高萩さんも最初は演劇という切り口で、演劇を見る人たちをどうやって育てていくかを考えていたんですね。たとえば、チケットを優先的に回すことなども含めて、立教の学生に演劇を見るという経験をさせる、ようするに演劇を見せることを早い段階でやるのが重要だとおっしゃっていた。その点、立教は小学校から高校、大学までありますから、学生たちが演劇を観る、コンサートを聴く場として、ぜひ劇場を活用していきたい。

というのは、今の学生はたいへん忙しいんです。授業にちゃんと出る。授業が終わったらアルバイトがあり、部活動などに入っている人も含めて非常に忙しい。昔みたいに、授業をサボって麻雀して、なんとなくふらふら地域にいる（笑）……という意味での地域活動はしない。それは、大学が様々な機能を自分の内側に入れてきたことも無関係ではありません。たとえば今、語学の授業は大学の核になっていますが、昔の学生は、外国語を学ぶためには、学外の語学学校に通っていた。そういう事情も含めて考えていかなくてはならない。

それでも学生は、学内には留まっているので、彼らの居場所をもうちょっと地域に広げていきたいですね。そのとき、東京芸術劇場は大学と駅の間接点として重要な拠点になると思います。劇場と大学がつながると、たぶん学生の行動範囲が広がってくる。つまり点が線になり、線から面に広がっていく形で、西口の全体の活性化とも結びつく気がしています。もちろん、演劇を観たり、コンサートを聴くようになってくれたら、より望ましいでしょうけれど。

**阿部** 学生が非常に真面目になった。いいことかもしれませんが、その反面、コミュニケーション力がなくなってきたと言われています。それは、社会との関わりがどんどん減っ



てきていることにも一因があるのではないか。経済産業省が「社会人基礎力」を提唱したり、文部科学省も学生に社会で生きる力——「学士力」と呼んでいます、これを学ばせようと言いつい出し、大学としても試行錯誤しているわけです。昔の学生は、自然と身についた力なのかもしれない。地域をぶらぶらしていれば（笑）。そういう意味では、西池袋には東京芸術劇場があり、池袋演芸場もありますから、芸術文化にふれることは難しくありません。そういう角度から地域と関わることで、いま言ったような力もつくのではないかと思います、いかがでしょう。

**福地** 今は、何をやるにしても行政が本気にならないと町づくりはできませんが、豊島区は高野区長の旗振り、芸術文化をベースとした町づくりをめざしている。この方向はきわめて正しいと思うんです。芸術というのは、人間が生きていくための必需品ではありませんよね。しかし、人間が人間らしく生きていくためには必需品だろうと思う。東日本大震災後、全国各地で寄付を集める運動がありましたが、企業メセナ協議会で、被災者や被災地を応援する目的で行なわれる芸術文化活動や、文化資源の再生活動を支援する「GBFund」を立ち上げたところ、たくさんの方から協賛をいただきました。震災直後は食料や衣料品の確保が最優先でしたが、少し時間が経って、今は心のゆとりみたいなものが求められているような気がしています。アートの世界に入っていきたいというニーズが多いのではないのでしょうか。

阿部先生がおっしゃったように、西池袋には東京芸術劇場があります。演劇は、野田秀樹さんに芸術監督をやっていただいて、野田さんの作品というだけでチケットが売り切れてしまうくらい評価されている。それから、音楽ホールとしても立派な機能を持っています。立教大学はもちろん、近くに東京音楽大学もありますから、音楽という面を生かしていく方向もあると感じます。とくに、3分間で表と裏が入れ替わるという二つのシステムを持ったパイプオルガンは、日本で東京芸術劇場だけです。世界でも類がないのではないかと。そういうものを持っている強みを生かすイベントができればいいですね。

**高萩** 立教には、教会音楽研究所があって、オルガン講座やレクチャーコンサートをやっていますよね。

**吉岡** キリスト教学研究科ではオルガン演奏法が正課授業に組み込まれていますし、オーガニスト・ギルドという学生団体もあります。また今度、池袋のチャペル（諸聖徒礼拝堂）と新座のチャペル（聖パウロ礼拝堂）に、新しいパイプオルガンが導入されることになりまして、2013年度中の完成に向けてプロジェクトが進行中です。現在、池袋のチャペルで使っているオルガンを、建設予定の新チャペル会館（仮称）に移しますので、大学としては3台のパイプオルガンを持つことになります。

**阿部** 福地さんの基調講演にもありましたが、アサヒビールのロビーコンサートで、立教のオルガニストの崎山裕子さんが演奏された。そういう関係も大切にしていきたいですね。

**高萩** これだけ近い距離に、何台も種類の違うパイプオルガンがあること自体、おもしろい。パイプオルガンつながりで、何か企画できそうな気がします。

**福地** それから、私は美術館によく行くので、絵のない世界は考えられないのですが、池袋には熊谷守一美術館くらいしか、絵を見る場所がないでしょう。

**阿部** かつてはセゾン美術館がありましたが、1999年に閉館してしまいました。

**福地** 演劇や音楽とともに、美術をどう生かすか考えたときに思いついたのが、町の素人画家

たち。私が、東京に来て最初に入ったのが「東京を描く市民の会」というグループでした。数十人が集まって東京中を描くんですが、じつは立教大学のキャンパスを描きに来たこともあります（笑）。そういった市民画家に参加してもらえないか。池袋はアートに関する催しが多いですから、大きなことを考えるより、小さくても、いつでもできることを、たくさん積み重ねていく。大分県の「BEPPEU PROJECT」が成功しているのは、そういうことだと思うんです。

**阿部** そうですね。他に、具体的な学生、あるいは立教とのコラボレーションといったときには、どんなことが考えられますか。

**高萩** 僕は、何かを本当にやってもらったほうがいいと思うんです。学生さんが真面目になったとおっしゃいましたけれども、だからこそ、いい加減には関わってこないと思う。時間的な問題にしても、今は携帯電話がありますから、一人の人間だけでなく何人かのグループをつくって、連絡を取り合いながら運営するとか、従来のようなボランティアやアルバイト、サークルやゼミ単位ではない、新しい学生団体のありかたを模索してもよいのではないのでしょうか。

たとえば、池袋西口では毎月のようにイベントが開催されています。池袋ジャズフェスティバル、フォーク&カントリーウエストパークフェスティバル、東京フラフェスタ、新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館、ふくろ祭り、東京よさこい……。どれも長く続いているものばかりですね。

**阿部** ええ。ただ、先ほども申しましたように、一過性のイベントが多いのではないかとも思います。あるイベントが終わると、まるで何もなかったかのように、町も静かになってしまう。そこに何か一貫した軸を据えて、地域に定着した文化をつくっていくことが、これからの課題になるのではないのでしょうか。

**高萩** そうですね。これは実務的な問題ですが、どのイベントも町の人たちがボランティアで運営していますから、非常に大変だと思います。ですから、どこかの部分を学生に任せられたら、もっと円滑に動けるんじゃないか。大学も、空いているキャンパスを使って、学生、教職員、そして町の人と一緒に運営できる事業を考える。劇場も——劇場自体、人手不足で困っていますが、自分たちだけでやるのではなく、学生に預けてしまえる場所をつくる。その中で学生たちも、社会がどういうふうになり立っているのか、若者やシニアが何を考えているのかを一緒に考えていけたら、少しずつ社会に入っていけるんじゃないかな。

我々の大学時代は、4年間しっかり遊んで、卒業したら髪を切って社会人になっていく……といった具合に、学生時代と社会人とが、完全に分かれていた。ですが、今は必ずしも4年で卒業しないで、5年、6年かかっても、それぞれ時期が来たら社会に入っていけばいい。そういう、ゆるやかな社会勉強の場として、池袋という町や劇場を使えば、いい関係ができるかもしれない。そのためにも、我々は居場所をつくってあげることが大切かなと思います。

**吉岡** 同世代なので、高萩さんのおっしゃることは非常によくわかるんです。ただ、学生時代が人生のちょっとした空白の時間で、自分が好きなように使える時間だという意識が、今の学生は非常に薄くなっているんです。大学に入って最初の1年間はホッとする。2年になって少し勉強がおもしろくなったら、もう3年から就職活動が始まる。親御さんたち

も最大の関心は、とにかく4年で卒業して就職するという事なんです。やはりこれはある種の「ニーズ」であると同時に「ウォンツ」でもあって、非常に強い圧力であることはたしかです。ですから「1年ぐらい留年したっていいじゃないか」と、けっして総長は言えない（会場笑）。

とはいえ、学生たちは機会が与えられれば自分たちで発見していく力はあるんです。また一方で、昔は伝統がありましたが、1970年頃に、その伝統が切れてしまったことも事実です。学生運動の時代、バブルの時代という二重の時代相があり、そのあとは不況が続いている。50%以上の学生が大学に進学するようになったという質の変化もありますが、いろいろな意味で伝統が切れているんです。

これは、私たち大学の教員側がやらなければならないことですが、昔のように学生の自主性に任せて、放っておくことができなくなってきていて、何らかの仕掛けをつくっていかなければならない。仕掛けをつくれば動き始める。その意味で、高萩さんがおっしゃったように、これからは大学という空間を利用していくことが非常に重要だと思います。

**高萩** 大学の資源を考えると、この建物の存在は大きいですよ。授業のないときに建物をどう使っていくのか。もちろん使うためには問題があると思いますが。

**吉岡** ただね、意外と大学の教室って空いてないんですよ。春休みや夏休みに立教大学に来てもらえばわかりますが、いろいろな試験などで使われている。そこも含めて考えていかなくてはいけない。

**高萩** 夜間は空いてないの？ セミナーがたくさんあると聞いたんですが。

**吉岡** セミナーはやっています。でも夜間だと、管理の問題をクリアしなくてはいけないという事が起こってくる。

**高萩** ターミナル駅からこんなに近い教室群というのも珍しいですよ。

**阿部** 珍しいですね。だからいろいろなイベントができるという面もあります。

## **質疑応答**

**阿部** それでは、残り時間もわずかですが、質問を受けながら、今の話を続けていきたいと思っています。

**質問①（学生）** 大学と駅の間には劇場があるという意義について、僕も大学に通う中で劇場に興味は生まれていますが、なかなか足が向かない。それは、演劇や劇場についてよくわからないので、自分とは関係ないと思ってしまう。ですから、人と人が出会える場を、劇場でつくったらおもしろいのではないのでしょうか。そうすることで、学生の自主性も湧いてくるのではないかと思います。

**阿部** 芸劇を出会いの場にできないかということですが、いかがでしょう。

**高萩** ぜひ、第二キャンパスになってほしいと思います。実際にいま、西口公園を立教や近隣の大学の、学生の第二キャンパスにできないかということ、ゼファーの方々と考えているんです。

**阿部** たとえば、西口公園に立教のテントがあって、学生が自主制作の催しや、演劇や音楽の発表をする、そんな場所にできないか。あるいはS.P.F. (St. Paul's Festival) を西口公園にまで拡大する。学外に飛び出して、地域との関わりの中で展開する学園祭ということ

も実現できたら、おもしろいかもかもしれませんね。

**福地** 私は、立教大学の演劇部に、東京芸術劇場の小ホールを使ってほしいですね。まず大事なのは、とっかかりだと思えます。最初に何かを見て、興味が湧くと次に見てみたいものが生まれる。自分たちの仲間がやっている芝居なら、見に行こうかという気になるでしょう。ぜひお使いください（笑）。

**高萩** 実際には難しい部分がありますけどね。アマチュアの方が使うには、ちょっと（使用料金が）高いですから。

**阿部** そこは、それこそ協定でどうにか……（笑）。歌舞伎などの伝統芸能には、入門コースみたいなものがありますよね。座学的な講座を含めた観劇の機会を、大学と芸劇で提供するところから始めてもいいでしょうね。

**質問②（学生）** 学生団体と立教大学および東京芸術劇場とのコラボレーション企画を考える上で、その企画の発案権について伺いたと思います。学生団体のほうから提案を出すことが可能なのか、大学側から学生側に告知があるのか、それとも東京芸術劇場と大学の間で先に考えられることなのか。その過程が気になります。

**高萩** 非常に“今”らしい発言ですよ。おもしろければいいじゃないって、僕なんか思っちゃうけど。

**阿部** どんどん出せばいいのにね。ちょっと許可をもらって、というのが……

**高萩** 全然許可もらう必要ないから！（会場笑）ただし単なる遊びではなく、社会のフレームの中で、ちゃんと採算も考慮した事業としてやるという前提は当然必要です。そういうはっきりした目的があれば、劇場としてもサポートできる体勢をとり得るだろうと思えます。アマチュアの交響楽団やメサイアが劇場を使います、というのは普通の関係ですから、どう便宜を図るかの話だと思うけれど、そうではなくて、世界第2位の乗降客を誇る池袋駅と、東京芸術劇場という空間があって、そして立教大学がある。ここを使って何か新しいことをやってみようという提案が出てきたら、結構おもしろいんじゃないかな。

**阿部** いいですね。たとえば、先ほども紹介しましたが、としま未来文化財団では住民提案型のプロジェクトに助成金を出しています。ぜひ学生さんからも新しいアイデアを出していただいて、事業を考えていければいい。これから大学と劇場とで具体案を考えていくわけですが、同時に、学内だけでなく、外からもご提案をいただいて、一緒につくっていく形が望ましいのではないのでしょうか。

**質問③（一般）** 自治体として、豊島区として、すでに区内での連携という取り組みがありますが、場所を限定した、あるいは施設の連携ということになると珍しいのかなという気がします。そうした中で、この先、どういう特徴が出てくるのか。とくに、単なるイベントだけに偏らない教育研究活動というバランスも求められると思いますし、新宿や渋谷という巨大なターミナルも、近郊に複数の大学が立地している。そういった他の副都心との差別化も含めて、どのような可能性があるのかを補足していただければありがたいと思います。

**吉岡** 「バランス」ということをおっしゃいましたが、個人的には、あまりバランスを考えていない（笑）。何かやれるところ、好きなことをできるような空間と時間をつくっていくことが重要だと思っています。たとえば大学が、東京芸術劇場でやる芝居を観ることに対

して単位を出そう、みたいな話はおかしいだろうと。でも、せっかく時間を使うんだから、そこで単位を出すべきじゃないかという議論は必ず起こる。ボランティアのように、単位を出すことが背中を押すことになることもあるので、否定はしませんけれども、そこから発想しないほうがいいと思っています。ですので、今回きっかけができたということ、また西口のところで、劇場だけでなく周辺の広場も含めて空間を使えるわけですから、そこをどう組織していくかが課題かなと思っています。

**高萩** 僕は1970年代に大学に入って、学生劇団から演劇活動を始めましたが、もう80年代のバブルのような、画期的なことは起こらないでしょう。我々は、どのように今の世界と妥協していくのか、その中でもどのように新しい考えをつくっていくのか、その知恵を共有していかななくてはならない。町の方々は学生さんと対話する機会をつくって、自分たちが身につけてきた社会的な体験を伝えていく。逆に、学生さんたちは未来へ向かって生きていくエネルギーを地域に寄与できる方法を考える。そういった関係は、共同作業をすることでしか生まれえないと思うんです。そこが、今のところ完全に分断されているのが、ちょっと悲しいかな。

**阿部** ありがとうございます。時間になりました（笑）。最後に私から一言、申し上げます。今日が始まりです。今日、期待を持ってご参加くださった方がたくさんいらっしゃると思いますが、みなさんと一緒に協働して、東京芸術劇場と立教大学の連携を進めていきたいと考えています。福地さんがおっしゃったように、芸術文化は人間が人間らしく生きていくために必要だということです。立教大学には、演劇を専門としている教員もたくさんいますので、そうしたリソースをうまく活用しながら、具体的な方策を提案していきます。未だかつてない演劇あるいは音楽を創造・発信する劇場と、近接する大学が連携し、それぞれが内側に閉じこもるのではなく、外に飛び出していく。それを空手形でなく、具体的にやっていくんだということを、福地館長、高萩副館長、そして吉岡総長、今日の発言の重みを感じていただいて、シンポジウムを閉じたいと思います。どうもありがとうございました。

※講演およびパネルディスカッション等の記録は、録音をもとに構成したものです。

（文責：立教大学ESD研究センター RA 後藤隆基）

# 成果報告

## 「シンポジウム所感：東京芸術劇場と立教大学の協働可能性を考える」

後藤 隆基（立教大学 ESD 研究センター RA）

### はじめに

シンポジウム「“西池袋”を刺激する！—東京芸術劇場×立教大学による持続可能な地域づくり—」<sup>1</sup>は、東京芸術劇場と立教大学の連携協定締結を記念して開催されました。東京芸術劇場から福地茂雄館長、高萩宏副館長、立教大学から吉岡知哉総長、阿部治 ESD 研究センター長が登壇、約 200 名の方々にご参加いただき盛況ぶりで、連携協定のキックオフ事業として、有意義な時間になりました。

協定締結に至る経緯や内容については、本報告書の概要（p. 2）やパネルディスカッションの記録（p. 23）で述べられていますが、2011 年 6 月 7 日に協定を締結したものの、具体的な事業内容などは未定というのが現状です。そうした事情に鑑み、東京芸術劇場と立教大学の連携を前進させる上で、まずは双方の共通地盤である「西池袋」地域との関わりを、視座に据えることが必要と考えました。

立教大学 ESD 研究センターは、2007 年の設立以来、多様な活動の中で、西池袋の持続可能な地域づくりを推進し、大学・地域間のハブ機能を担ってきました。当センターに蓄積された研究・人的資源の有効活用と社会還元によって、劇場・大学という二者間にとどまらない、地域も巻き込む形での協働と有機的なパートナーシップの可能性を探る。ESD 研究センターの事業として本シンポジウムを企画した意図は、そこにあります。

### 東京芸術劇場と立教大学の試み——協定締結の助走として

東京芸術劇場と立教大学の関係を考えるとき、入学式やメサイア演奏会に加え、立教大学交響楽団や庶民吹奏楽団、グリークラブなど学生団体の恒常的な利用も続いています。さらに近年では、施設貸借に限らない、両者の協働による企画も実施されています。とくに、東京芸術劇場副館長に高萩宏氏が就任した 2008 年以降、劇場と大学の交流にも新たな動向が見えはじめました。高萩副館長が劇場と大学の中継点に入ることで、従来なかった両者の関係が生まれたという事実は看過できません。

2009 年 9 月、東京芸術劇場から協定締結に関する打診があり、立教大学内のボランティアセンター職員・淵博子氏と、千石英世教授（文学部文学科〔文芸・思想専修〕／文学研究科比較文明学専攻）、さらに高萩氏と学生時代から旧知の間柄であった吉岡知哉総長（当時・法学部

---

<sup>1</sup> ここでいう「西池袋」とは、町名としての「西池袋」だけを指すのではなく、池袋西口地域全体を示す意味で用いている。

政治学科教授)を交えて、同年10月に最初の懇談が行なわれました<sup>2</sup>。以下に掲げる東京芸術劇場との試みも、ボランティアセンターの瀧氏と、千石教授を中心に実現したものです。

ここでは、東京芸術劇場と立教大学の連携協定締結が、突如降って湧いたものではなく、劇場・大学間における、少なからぬ共同作業の蓄積の上に成立しているという前提を示しておきたいと思います。

たとえば2010年、イスラエルでドラマトゥルクとして活躍する、ヴァルダ・フィッシュ氏の講演会「イスラエルの現在：演劇から見た文化状況」(10月23日、主催：立教大学文学部英米文学専修／協賛：東京芸術劇場)が開催されました<sup>3</sup>。2012年には、日本とイスラエルの外交関係樹立60周年記念事業——東京芸術劇場とテルアビブ市立カメリ劇場による国際共同制作プロジェクトとして、ギリシャ悲劇『トロイアの女』(蜷川幸雄氏演出)が上演されます<sup>4</sup>。その前段階のワークショップをイスラエル人と日本人の俳優で行なうため、東京芸術劇場の招聘でヴァルダ・フィッシュ氏が来日し、講演会が実現したわけです。

また2011年、第6回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館<sup>5</sup>の一環として、トークショー「グローバル演劇都市池袋！」(7月29日)が立教大学で催され、高野之夫豊島区長、高萩宏氏、相馬千秋氏(F/Tプログラムディレクター)、新野守広教授(異文化コミュニケーション学部)、J.T.ドーシー教授(文学部)、細井尚子教授(異文化コミュニケーション学部)、司会として千石英世教授が登壇しました。立教大学には多様なジャンルの演劇研究者が所属しています。しかしながら、そうした教授陣が一堂に会し、かつ外部から、豊島区の文化振興政策を推進している高野区長や、演劇現場の最前線で活躍する高萩氏・相馬氏といったゲストに招いたイベントが学内で催されることは、管見のかぎり例がなく、貴重な機会であったと言えきでしょう。

以上の点に鑑みれば、連携協定および今回のシンポジウムも、近年試みられてきた〈劇場×大学〉による協働の延長線上に位置づけられるものなのです。

## シンポジウム概観

シンポジウム当日は、劇場・劇団関係、省庁・東京都・豊島区など行政関係、各種企業、マスコミ・出版、さらに近隣の町会・商店街など、幅広く多様な立場から約200名の方々にご参加いただきました。そうした聴聞席の賑わいはそのまま、東京芸術劇場と立教大学の連携に対する期待の表れだったと言えます。学内外の教職員・学生の方々のご参加も含めて、今後具体的な事業を動かしていく上で、大きな意義があったはずです。

シンポジウムは、吉岡知哉総長の開会挨拶で幕を開け、阿部治ESD研究センター長によるイントロダクション、福地茂雄館長と高萩宏副館長の基調講演のあと、休憩を挿んで、パネルディスカッションが行なわれました(それぞれの詳細は前掲の記録をご参照ください)。

<sup>2</sup> こうした流れの中で、高萩氏が、2010年度から文学研究科比較文明学専攻の兼任講師に就任。同年度前期には、文学部文学科(文芸・思想専修)でも講義を担当した(隔年開講)。

<sup>3</sup> <http://www.rikkyogakuin.jp/events/2010/10/7786/> (2012年2月12日閲覧)

<sup>4</sup> 花岡洋二「蜷川さん イスラエルで12月に劇」(『毎日新聞』2012年1月13日夕刊)、内田洋一「蜷川劇 中東の「壁」超えるか」(『日本経済新聞』同年2月11日朝刊)など参照。2012年12月に東京芸術劇場とテルアビブ市立カメリ劇場で上演予定。

<sup>5</sup> 東京芸術劇場と立教大学は実行委員会に参画している。

前半部の、各登壇者に共通するキーワードは「変化」だと言えます。現代において、時代や社会状況の変化とともに、大学、企業、劇場、地域、それらを包摂する社会（世界）全体が、従来のありかたから、次なる新しいありかたへの転換を迫られている。四者の論旨は、そうした現状認識に基づいたものです。そして、それぞれの現実的課題を解決するためには、個別に働くのでない、また一方向でない、他者との相互補完的なコミュニケーションが必要であり、新たな関係性の構築と協働、その場づくりが必要である。立場や経歴の異なる四者の視点から浮かび上がったのが「変化」の希求という共通意識であったことは、本連携協定にとどまらず、社会（世界）の持続可能性を読み解くヒントになるでしょう。そして、ESDの「異なる現実的課題を抱える人びとが同じテーブルについて、個々の問題を共有し考える」という観点から思考を組み換えることも、課題解決のための有効な方法なのではないでしょうか<sup>6</sup>。

後半部のパネルディスカッションでは、司会を務めた阿部センター長から、西池袋という地域のイメージ、次いで〈劇場×大学〉の協働ビジョンの2点が、主要テーマとして問題提起されました。

まず第一の点については、高萩副館長の「主となる大きなステークホルダーの不在」という意見に関して、吉岡総長から、池袋におけるステークホルダーは大きくはなく細分化されているかもしれないが、生活と重なっている（＝駅前にも人が「住んでいる」という池袋の商店街の特徴）ことが重要という指摘がありました。また地方都市との比較から池袋の特徴を挙げられた福地館長の言を受けて阿部センター長が述べたように、地域という問題を考えるとき、いわゆる「地方」と、東京という「中央」の都市環境とは別個に捉えなくてはなりません。

立教大学、東京芸術劇場ともに世界まで視野に入れた運営を展開する中で、お互いの立地点として「西池袋」がベースであることを前面に出していく。そうした共通認識をもって協働ビジョンを描くべく、討議は次のテーマへと移っていきます。

議論の焦点は、ほぼ「学生が社会を学ぶ場（＝第二のキャンパス）としての地域との関係づくり」という問題に集約されました。個々の見解は前掲の記録にあるとおりでありますが、ここではパネルディスカッションの中で示された連携の可能性と、そこから考えられる事業案を、聊か恣意的ながら、順不同で数例挙げてみます。

### ①パイプオルガンを利用した企画

西池袋の近い範囲内にタイプの異なるパイプオルガンが複数あるという特殊な環境を利用した鑑賞ツアー等。すでに東京芸術劇場や立教大学教会音楽研究所で個別に実施されているパイプオルガン講座やコンサートの共同開催。

### ②演劇（音楽）鑑賞のための入門講座

東京芸術劇場で上演される演劇・音楽公演の入門講座。学生・教職員・地域住民を対象として作品についてのレクチャーを行ない、その後、実際に舞台を鑑賞する機会を設ける。学生や地域への劇場文化の普及。将来的な観客動員への期待。

---

<sup>6</sup> 阿部センター長は、ESDを「人々が持続可能な社会の構築に主体的に参画することを促すエンパワーメントであり、そのための力（つなぐ力、参加する力、共に生きる力、持続可能な社会のビジョンを描く力、など）を育む教育や学び」と定義している。（阿部治「ESD（持続可能な開発のための教育）とは何か」、生方秀紀・神田房行・大森享編著『ESD（持続可能な開発のための教育）をつくる——地域でひらく未来への教育——』所収、ミネルヴァ書房、2010年）



### ③西口公園における「広場」の復権

NPO 法人ゼファー池袋まちづくりを中心とした、西口公園の「広場」化への協力。劇場および周辺環境の緑化や、多様な事業提案、学生の参画など。西口公園で開催されるイベントに一貫性を持たせ、地域文化の定着を図る。S.P.F.の西口公園への拡大。学生音楽団体による「まちかどコンサート」などの実施（④とも関連）。

### ④学生による事業提案・劇場および地域への参画

学生団体による劇場の恒常的な利用（従来、東京芸術劇場を拠点に活動していた音楽関係団体だけでなく、演劇関係団のなどが協働できる事業提案を図る）。また地域主催のイベントへの参加。その際に重要なのは、高萩副館長が指摘した「社会のフレームの中で、ちゃんと採算も考慮した事業として」（p. 27）の明確な目的意識をもった提案であること。

### ⑤大学というキャンパス空間・教室群の活用

管理問題も含めた活用法の模索。次節⑧⑨⑩などとの関連。

### ⑥初等教育からの演劇教育導入の可能性

学校法人立教学院は、小学校から大学まで有する教育機関であり、初等教育からの演劇教育導入という可能性も内包している。

## **シンポジウムをふまえた協働可能性**

前節末に掲げた事業案の多くは、当然ながら直近には実現困難であり、実務的な作業を含めた数多のステップを経て、初めて構想の段階に至るものです。ですが、今後の協議のために何かしらのヒントになれば勿怪の幸いと、敢えて列挙しました。

また、シンポジウムおよび前後の状況をふまえて、以下の協働可能性（主に大学側からのアプローチとして）も考えられるのではないのでしょうか。これらは、あくまで報告者の私見であることを予めお断りしておきます。

### ⑦インターンシップ制度の整備

従来も、学生個人の申込、教員の紹介といった形でのインターンシップは行なわれていたが、たとえば今後は、大学側の窓口を統一し、手続きを効率化することで、劇場側の負担軽減にも寄与できる体制を整備する必要があるのではないか。

### ⑧定期的な講演会やシンポジウム、連続講義（講座）の実施

劇場・大学それぞれの（あるいは地域に内在する）文化・研究・人的資源を生かした、講演会やシンポジウム、ワークショップなどの持続的な取り組み。授業や連続講義（講座）等を通して、劇場文化の理解・普及、西池袋独自の地域文化の発掘・再考に努める。

### ⑨東京芸術劇場の事業への協力、関連企画の実施

前掲②⑧とも多少重複するが、2012年度の主な動向を見ると、下記2点が当面の大きな事業として考えられる（広報・観客動員の協力も含む）。

- 1) 東京芸術劇場のリニューアルオープン（2012年9月）に向けた、講演会やシンポジウムなどの関連企画（ex. 野田秀樹芸術監督の招聘講演など）の実施。

- 2) 日本・イスラエル外交関係樹立 60 周年記念事業『トロイアの女』（2012 年 12 月）に向けた、講演会やシンポジウムなどの関連企画（ex. イスラエル演劇や文化を学ぶための講座、蜷川幸雄氏の招聘講演など）の実施。

#### ⑩フェスティバル/トーキョー（F/T）への協力

豊島区を中心に開催されている「フェスティバル/トーキョー」（2009 年～）は、アジア発信の国際演劇フェスティバルとして、認知・評価ともに高まっている。従来は深く関与してこなかった立教大学としても、研究・人的資源の提供、キャンパスおよび構内施設の貸与といった協力が望まれる。東京芸術劇場も重要な会場の一つであり、したがって協定による連携の範疇に入るものと考えられる。

#### ⑪アジア地域との交流と多様性の創出

野田秀樹芸術監督は、1998 年の『赤鬼』公演をはじめ、タイの演劇人との交流と協働を行なってきた。2009 年、バンコク・シアター・ネットワーク（BTN）と東京芸術劇場の提携で野田氏の作品『赤鬼』『農業少女』（いずれもタイ版）を日本・タイ両国で上演し、タイ国立チュラロンコン大学では『農業少女』をテーマに集中講座を開講。2010 年には、同大学のパウイト・マハサリナンド教授（文学部演劇学科）が来日し、公開講座「タイ現代演劇における外国戯曲の翻訳・脚色・翻案」を催した。チュラロンコン大学は、立教大学と国際交流協定を結んでおり、タイにおける ESD の中心的機関「持続開発（ESD）研究センター」が設置されている<sup>7</sup>ことに鑑みれば、立教大学および ESD 研究センターとも無縁でなく、将来的な劇場・大学の連携の中に、アジア地域との交流を含めることも可能かもしれない。西池袋における多様性という観点からも、検討の余地がある問題だろう（p. 8, 21 参照）。

### おわりに——今後の課題として

以上、シンポジウムに関する所感と、今後の協働可能性について、多分に私見を交えつつ縷述してきました。今回は主に、当事者間の意識共有、連携協定の幅広い周知といった意味での成果が見えたように思います。具体的な方策の提案には至りませんでした。本シンポジウムを連携協定のキックオフ事業と位置づけるならば、持続的かつ発展的な関係構築と活動実践が望まれます。

劇場と大学という大きな組織同士が、具体的な事業を考える場合、今回、ESD 研究センターが担ったようなハブ機能を、内容や状況に応じた部局が担わなければなりません。そのためには大学内での“横”の連携が不可欠であり、劇場と大学の連携推進と同時に、組織内での連携や情報共有も喫緊の課題です。その上で各学部や研究科、研究所等が協定の存在を認識し、多分野の教職員・学生が、協定から得られる成果を有効活用し、それぞれの研究・実践を社会還元する。そうした意識が定着化することで、各自の能動的な取り組みが生まれるのではないのでしょうか。

一方、協定の締結により、大学側（学生も含む）から劇場側への、様々な協力要請の類が増加することも想定されます。そのとき、問合せに対する可否の判断を、すべて劇場側に任せて

<sup>7</sup> 2012 年 12 月 23 日に、チュラロンコン大学において、立教大学 ESD 研究センターの成果報告会が行なわれた。

しまうのではなく、大学側として一旦フィルターをかける場の設置が必要になるときも来るかもしれません。双方の負担軽減、手続きの効率化、連携の質的向上は、相互協力と情報共有なしに成立し得ないように思われます。

また、大学の教職員、劇場スタッフ、あるいは、行政や地域の関係者なども交えた検討委員会のような組織が求められることも考えられます。劇場と大学と地域の三者による協働をめざす以上、東京都、豊島区、町会、商店街、地域NPOとのネットワーク——より「地元」に密着したネットワーク——の構築は必須です。従来にない新しい関係、多角的な視点からの事業提案が、西池袋独自の地域文化の共創や、持続可能な地域づくりにもつながるのではないのでしょうか。

本シンポジウムは、劇場・大学間の協定のあくまでも入口であり、実際の連携は時間を要する仕事だという認識も新たになりました。むしろ時間をかけてでも、風化させることなく続けていく。持続可能性とは、それを持続しよう（させよう）とする意志と具体的な実践の集積の上にこそ成り立つのだと思います。協定があるから何かしなくてはならないのではなく、誰かが、何か新しい提案を実現したいときに、協定の意義が発揮されるような、状況と目的しだいで、柔軟に変化しうる、そんなゆるやかさも内包する関係が構築できるといいでしょう。ESDという視点を導入することで拓かれた道が、今後、主体的かつ持続可能な形で、多彩に展開していくことを願ってやみません。

# 參考資料

# 参 考 資 料

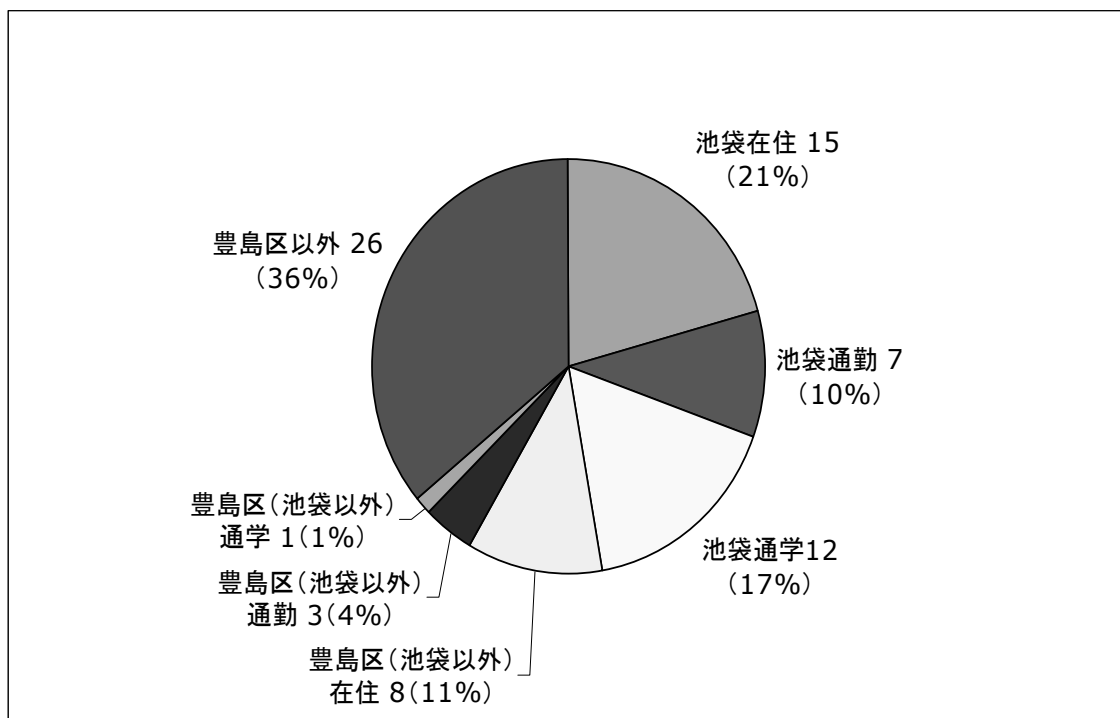
## ◆動員人数

当日参加者合計（参加/事前申込〔割合〕＋当日）：192（128/165〔＝77.6%〕＋64）

※未受付の参加者も複数いたため、実際の数は200名強か。

## ◆アンケート集計結果（記名59＋無記名11＝70）

### 1. 池袋とのつながりについて（複数回答有）



### 2. 今回のシンポジウムに参加した理由等をご記入ください。

#### ◆地域・まち（づくり）に関する興味（主な回答を整理し、一部を抜粋します。以下同）

- ✓ 西池袋地域に在住・通勤・通学しているから。
- ✓ 自分が生まれ育った（生活する）地元の問題だから。
- ✓ （芸術を契機とした）まちづくり自体に興味があるから。
- ✓ 西池袋の今後を考えたかったため。
- ✓ 地域を活性化する事業とアートによる振興に興味があったから。
- ✓ 現在地域活性化活動を行っており、まさに学生と池袋地域と合同でイベントを行ないたいと思っていたので。
- ✓ 「池袋」の後進性、いろいろな商業業績など、まちづくりの将来性への関心、北の玄関口

とし独特なまりづくりに期待したい。

- ✓ 地域のつながりが薄いと感じる池袋に、文化と大学の力がどのように影響していくのに関心があった。
- ✓ 地域と立教大学の関係に興味があり、自分でも地域を巻き込んだイベントをしたい。

#### ◆劇場・演劇・芸術に関する興味

- ✓ ESD と芸術との関わりについて考えたいと思ったから。
- ✓ 演劇活動に携わっているから。
- ✓ 演劇のこれからを考えなかったため。
- ✓ 西池袋の演劇について、立教生として何かできないか興味があった。
- ✓ 立教のOGで豊島区在住。学生時代は交響楽団に所属し、芸劇を使用していた。
- ✓ 「劇場」という場が好きだから。
- ✓ メセナや劇場のありかたに興味があるから。
- ✓ 芸術劇場のリニューアル後の展開に興味があったため。
- ✓ 演劇のマネジメントや劇場運営と、大学のCSR両面に興味があったため。
- ✓ 東京芸術劇場をお借りしている知人がいるため。

#### ◆連携・協定全般に関する興味

- ✓ 芸術（劇場）と地域（大学）との連携・文化活動に興味があった。
- ✓ 立教大学に在学しており、観劇が好きで東京芸術劇場にも通っていたので、以前からもっと密に交流してほしいと思っていた。また“劇場の地域づくり”について研究したいと思っている。
- ✓ 公立の「劇場」と私立の「大学」という組み合わせによって、どのような連携の取り組みができるのか知りたい。
- ✓ 回遊美術館の際のエンゲキ街あるきに参加して、立教大の取り組みに興味をもったので。
- ✓ 協働事業のあり方を知りたかった。

### 3. シンポジウムのご感想、また協定に関するご意見・ご期待等をご記入下さい。

#### ◆感想・意見 1

- ✓ パネルディスカッションが一番興味深かった。
- ✓ 質疑応答の時間がもっとあればよかった。
- ✓ 豊島区長、町会や商店街の会長なども含めて、テーマごとにメンバー構成をするとよいのではないか。
- ✓ 自治体職員もパネリストに入れて、より具体的な話がききたかった。
- ✓ “地域との協働をめざす”としながら、西池袋地域からは誰も発言がないのは少し問題ではないか。
- ✓ 企業としての苦勞の話をもっと伺いたかった。(明確に利益が上がらない事業を、どう持続させていくか、連携をすすめていく上での苦勞)

## ◆感想・意見 2

- ✓ 具体的な提案・取り組みに期待したい。
- ✓ 第一歩とのことだったので、2回目、3回目を楽しみにしている。
- ✓ まちづくりの協働作業、地域の活性化に可能性を感じる充実したシンポジウムだった。
- ✓ 学生・サークル団体から芸術劇場へ企画を持っていけるようになりたいと思った。
- ✓ 学生が、大学・地域と結びついたイベントや芸術活動をできる機会・施設がもっとほしい。
- ✓ 大学は、学生が主体的に発言し、活動を起こしやすい体制をつくるべきだと思った。
- ✓ 東池袋中心に生活しておりましたが、昔から西池袋の発展形態や東との融合如何、芸術文化を中心としたまちづくりの担い手としての立教大学の役割、劇場と地域生活者の多い池袋地域住民とのコラボレーションについて考えていました。大いに議論してほしい。
- ✓ 劇場には日頃から通っておりましたが、余韻を楽しむ場が少ないのが不満です。「池袋」につきまとう負のイメージ、銀座や六本木、新宿、渋谷とも異なる独自路線をどう考えるか。外国人も含めた地域住民と知恵を出し合う機会もぜひつくってほしい
- ✓ 現在の学生気質に大変驚いた。芸劇はターミナル駅から地下道へつながっている数少ない施設で（この事実自体もアピールされていない。立教生だから知っている事実でもっていないと思います）、その利便性を色々な方向に使えるのではないかと思いました。演劇があまり見られていないことをひしひしと感ずるので、若い人たちに見せるという意見は共感しました。
- ✓ 意外と自由な発想が受け入れられるのかな、と思いました。又、館長さんの「人間が人間らしく生きるため芸術は必要」という言葉にとっても共感しました。
- ✓ もう少し突拍子のない、取組、提案等があれば、より良いディスカッションに発展していくのではと感じました。
- ✓ やっぱり大人の責任なんだと思いました。学生さんに「自由に好きなことをしなさい」と言う。でも、それはものすごい無責任なこと。大人が学生にきちんと教えないと、次のステップはできないということがわかった。
- ✓ 福地館長には、具体的事例でなく、文化・芸術と社会（大学）に関する哲学・思想的なお話を伺いたかった。高萩さんについては、区立ではなく都立という視点を池袋西口という限定的地域といかに整合性をとるのか、といった、池袋西口という立地についての徹底的な考察を踏まえた劇場戦略を伺いたかった。
- ✓ まちづくりの必要性が緊急に求められていることを感じた。学生が社会と関わりあって学ぶことができる授業以外の機会をもっと増やしてほしい。
- ✓ 元々期待していた部分はもちろんですが、あまり池袋になじみのない者としては、池袋への見方が変わるようなお話を聞いて面白かったです。また福地館長が数々の具体的な事例を示されていたことが、「これから」を考えていく上で刺激になったように思います。ぜひ今後もこのような形での発信を継続的に行なっていただきたいと思いました。様々な関係者の方々が、それぞれの立場で抱えている問題を共有できたのではないのでしょうか。スタートとして面白い取り組みだったと思います。
- ✓ まちづくりの共同作業に非常に可能性を感じさせる充実したシンポジウムでした。とても主体的、自発的な力を感じます。音楽を通じて何ができるのか考えていきたい。持続可能

性と芸術・音楽との関わりを考えると、これまでのアプローチや既存の取り組みにこだわらず、現実を見つめて新しく考えていくことの可能性に元気づけられました。

- ✓ 「地域」を考える上で避けて通れない問題として、どこまでの範囲を含めるか、ということがあると思います。特に、東京芸術劇場に隣接する西口広場には、多くの家を持たない人たちが野営をしています。新宿西口広場（現：通路）のように強制的退去を迫ることのない寛容さには敬服しております。先日英国で演劇的实践を通してホームレスや囚人に社会参加の機会を促す活動をしている劇団の演出家の話を聞くことがあったもので、本日のシンポジウムでは社会福祉的な視点に関しては特に触れられていなかったのですが、「地域」あるいは広場といったものを考えるに際して（とりわけコミュニケーションの問題として）重要な因子であるとも思いますので、次回以降、開催の機会がありましたら、その点に関連したお話も聞かせて頂けたら幸いです。
- ✓ とても素晴らしい協定だと思っておりますので、具体的なものに発展させ、学生や地域の人が積極的に参加出来るようなものを企画していただきたいと思っております。学生の方から芸劇さんへ企画を持っていけるようになりたいと思っておりました（金銭面で難しいですが…）。高萩さんのお話、とても期待感が高まりました。芸劇は田舎から出てきた私にとって憧れでしたので積極的に関わっていきたく思っています。
- ✓ 福地館長のアサヒビールのメセナ活動の紹介や高萩副館長による劇場の歴史と役割等、大変興味深く拝聴いたしました。今後の具体的な取り組みは徐々に固めていかれると思っておりますが、あらゆる層を巻き込んだ展開になることを期待しております。
- ✓ 大学にはたくさんの資源があり、また地域にもたくさんの挑戦できる環境があるにも関わらず、大学生が、そのことに気づいていないところが問題だと考えてきました。多くの学生は、大学受験の結果として入学するため、キョロキョロと周りを見回している間に時間が経ってしまうものです。「入学してやりたいことがわからない」「不本意入学でモチベーションが上がらない」といった学生たちが、もっとまちづくりに参加できるよう案内してあげるの大切だと思います。
- ✓ 興味深いシンポジウムをありがとうございました。私は、新座キャンパスに通学しています。是非池袋キャンパスだけでなく新座のことも考慮に入れていただきたいです。映像身体学科で演劇をやりたい人はみんな外部に出ています。折角なので、学校と結びついた芸術活動をできる機会・施設がもっとほしいです。地域や劇場運営の場に学生の居場所ができれば、絶対参加する学生はいますし、私も参加したいです。卒業制作もほとんど認知されていません。学生、学校全体がそれを知って見にくる、意見を出しあえる場があれば絶対おもしろくなります。
- ✓ 劇場と立教との関係で、立教側からサークルとして関わることはできるのでしょうか？授業や教授を介してでないといけないのでしょうか。
- ✓ 今後も立教大学の学生として、池袋西口地域のつながりに主体的に関わっていきたく思いました。高萩さんがおっしゃっていたように、学生が地域イベントや事業に関わる場があると嬉しいなと思います。私もぜひ関わりたいです。
- ✓ ありがとうございました。具体的にこれからどう連携していくのか、興味深いです。オーケストラの団長さんの心配（質問）の意図は、すごくよく理解できます。私もオーケストラ出身です。オーケストラに限らず、学生音楽団体、演劇団体は、日々の活動でかなり忙



しいし、人数も多いので、いきなり「自由な発想で好きなようにやれ」と言われても難しいのかなと思います。

- ✓ ソーシャルコミュニティへの興味から参加しました。内容を十分に理解していない状態で出席しましたが、素晴らしい内容に、ほんとうに感動しました。日本の未来、世界の未来にとっても力強い一つになると感じました。今までの時代をふり返る時間があたえられ、立ちどまって考える時間ができました。ありがとうございました。自分の息子も含め、このような場があることをもっと皆様に広めたいと思います。特殊な立地条件、素晴らしい学校だと思いました。健康の仕事をしたいのですが、芸術と治療と農業に関わりたいと思っています。
- ✓ 西池袋とは何か。大学と劇場という視点で考え、生活者として聞きました。再びこのような会の開催をお願いします。町もアクションを起こしていますが、小さいです。
- ✓ 高萩さんの「場を預ける」、総長の「仕かけをつくと動きはじめる」など、学生の立場から聞いていても、今の学生のことをよく理解されているなと感じました。大人と学生は少し違うと思っていましたが、“共有”できる世代の方がいらっしゃることが嬉しかったです（学生の立場を断定して話される場合も多いので）。私は、他大の学生団体やボランティア団体に所属していますが、立教は閉鎖的に思います。色々な規制（その必要性もわかるが）が多い。もう少し、学生が何かをやる時に「どうぞ！」と簡単に取り組める体制をつくってほしい。
- ✓ 若い人が将来に夢を持たない時代の中で、少しでもステップアップできる気持ちが持てるような試みが重要だと思います。
- ✓ 池袋に限らず、学生が主体的に発言できる場をもっとつくるべきだと改めて感じた。
- ✓ 大勢の参加者（想像以上）、とくに若い方が多い。いかに今、東京芸術劇場と立教大学の力が池袋西口に必要か。このようなシンポジウムを重ねることや、劇場のリニューアルによって、池袋の文化を確立していくことに期待している。

# 当日配布資料

※資料は、立教大学 ESD 研究センターHP でもご覧いただけます。  
(<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/index.html>)

## シンポジウムのねらい ＝ESD・地域・文化・大学＝

阿部治

1

## ESDとはなにか

(Education for Sustainable Development)

- 持続可能な社会づくりの担い手を育てること。
- 持続可能性(サステナビリティ)を教育・学習の中心に据えること。
- 人と自然、人と人、人と社会の関係を時間・空間を越えてより良い関係に変えていく学び。3つの公正(世代内、世代間、種間公正)
- 多様なステークホルダーをつなぐ装置である。
- 国連ESDの10年(2005－2014)

2

## 劇場と大学の連携:事例

- 国立文楽劇場×関西学院大学 2010
- 大阪市立大学文学部特別授業「上方文化講座」2004
- 人形浄瑠璃 ユネスコ無形文化遺産(2008)  
地域の素材を学問の対象、すなわち研究・教育(授業や講座、学生の観劇)として扱っている。

3

## 劇場と大学の連携:事例

- わらび劇場(わらび座)×秋田県立大学 2007
- わらび劇場(わらび座)×秋田大学 2008

東北・秋田という地域に根ざす産業、資源、伝統文化(芸能)を基盤とした連携。農村の有効活用など。

- 長野市民会館(長野市)×東京藝術大学 2011

4

## 劇場と大学の連携:事例

- 彩の国さいたま芸術劇場×埼玉大学
- せんがわ劇場(調布市/地域連携事業)×桐朋学園芸術短期大学
- トーキョーワンダーサイト×青山学院大学(社会学連携研究センター)

5

## 地域づくりとアート

- 越後妻有 大地の芸術祭アートのトリエンナーレ
- 瀬戸内国際芸術祭(直島アートプロジェクト、他)

現代美術による非日常空間の創出  
過疎地の活性化  
参加・協働

6

### 地域を創り、人をつなぐ文化の事例

- 過疎からの脱却  
鹿児島県鹿屋市柳谷集落  
迎賓館(空家の活用) 芸術家の移住  
「文化は地域の宝、文化がなければ地域がつぶれる」  
(豊重氏)
- 震災復興/除染に向けて連帯する市民  
いわき芸術文化交流館/アリオス  
「市民が結びあうこと、助け合うこと、支えあうこと、そういう人生を送っていくための『道具』としての文化施設」  
(大石氏)

7

### 鹿児島県鹿屋市柳谷集落(やねだん)

典型的な過疎集落(130戸) 08年から人口増に変化  
若い公民館長(区長)の出現で劇的に変化  
補助金に頼らず住民手作りで地域づくり  
迎賓館(空家の活用) 芸術家の移住  
土着菌センター  
からいも栽培によるオリジナル芋焼酎造り・販売  
住民による施設の手作り(緊急警報装置(集落放送)、  
未来館(そばや)、歴史館、寺子屋など)  
収益を住民に還元(ボーナス)  
やねだん故郷創生塾

8

### 池袋西口まちづくり関連事業

- 豊島まちづくりバンク
  - ゼファー池袋まちづくり
  - アイポイント(地域通貨)
  - 池袋モンパルナス
  - まちなかカフェ
  - ふくろ祭り
  - フォーク&カントリー野外ライブ
  - 古本まつり
  - .....
- 一過性のイベントから定着した文化へ

9

### 芸術劇場と立教大学の連携

- アートというよりは演劇+音楽
  - 教育・研究の対象というよりは文化の共創・協働
  - 屋内から屋外(地域)へ
  - 組織内の資源の活用のみでなく地域に内在する資源の活用
  - 地域住民(居住者、通勤者)の参加(風土の人)
  - 住民(通勤・通学者)の誇り/アイデンティティー/地域愛
  - 地域の多様な資源(多様性)
  - 単体同士のつながりにとどまることなく、地域を巻き込む協働/共創
- ⇒池袋西口文化の創造に貢献

10

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」  
東京芸術劇場×立教大学による持続可能な地域づくり

---

## 企業メセナ活動と 芸術文化による地域づくり

——大学とのコラボレーションの事例から——

福地 茂雄  
東京芸術劇場 館長  
アサヒグループホールディングス株式会社 相談役  
公益社団法人企業メセナ協議会 理事長  
財団法人新国立劇場運営財団 理事長

1

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

## 企業メセナ活動のこれから

- ・ お客様満足型メセナへ
- ・ パトロン型からパートナー型へ
- ・ 地域メセナの重視へ
- ・ 社会との共感をめざして

2

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

## 企業メセナ活動のこれから

- ・ お客様満足型メセナへ
  - こちら岸から向こう岸へ
- ・ パトロン型からパートナー型へ
- ・ 地域メセナの重視へ
- ・ 社会との共感をめざして

3

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

## 企業メセナ活動のこれから


- ・ お客様満足型メセナへ
  - こちら岸から向こう岸へ
  - 「ニーズ」型から「ウオッツ」型へ
  - 相手の「ニーズを捉えて」といったレベルから
  - 「ウオッツを探して」といったレベルで
- ・ パトロン型からパートナー型へ
- ・ 地域メセナの重視へ
- ・ 社会との共感をめざして

4

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

## 企業メセナ活動のこれから

- ・ お客様満足型メセナへ
- ・ パトロン型からパートナー型へ
  - 主役の交代
- ・ 地域メセナの重視へ
- ・ 社会との共感をめざして




5

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

## 企業メセナ活動のこれから

- ・ お客様満足型メセナへ
- ・ パトロン型からパートナー型へ
- ・ 地域メセナの重視へ
  - 地域の芸術文化資源を「活用」する
- ・ 社会との共感をめざして




6

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

## 企業メセナ活動のこれから

- ・ お客様満足型メセナへ
- ・ パトロン型からパートナー型へ
- ・ 地域メセナの重視へ
- ・ 社会との共感をめざして



連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

## アサヒビールの事例から

アサヒビールのメセナ活動の基本的な考え方

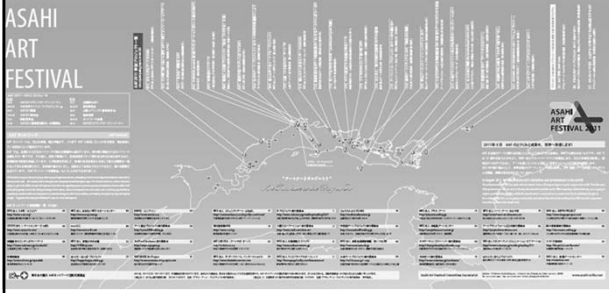
社会に開かれた企業を目指し、  
社会・市民とのパートナーシップを組んで、新たな価値創造に挑戦します。

[メセナ活動のキーワード]

- 「未来」= 未来文化創造への支援  
(先駆的な芸術支援、若手アーティスト支援、新たな価値創造等)
- 「市民」= 市民と芸術の橋渡し・市民NPOとの共感の確立  
(社会と芸術のつなぎ手としてのアートNPOの発掘に寄与、創造的な体験作りの場に寄与)
- 「地域」= 地域に根差した独創的な活動支援・地域文化発展への寄与  
(地域資源の再生・再活用、地域との共生)

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

## アサヒビールの事例から



ASAHI ART FESTIVAL

アサヒ・アート・フェスティバル  
全国のアートNPOや市民グループのみんなでつくる'アートのお祭り'

9

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

## アサヒビールの事例から



10

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

## アサヒビールの事例から



連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

## アサヒビールの事例から



アサヒ・アート・フェスティバル2007  
「自分たちのお茶会をつくる - 千利休の心を知って」

12

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

### アサヒビールの事例から



京都造形芸術大学×アサヒビール大山崎山荘美術館 13

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

### アサヒビールの事例から



神戸大学×アサヒビール大山崎山荘美術館 14

アサヒビールの事例から



アサヒ ラボ・ガーデン 多様なお客様に向けたプログラム開発 15

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

### アサヒビールの事例から



アサヒグループホールディングス×大阪大学 16

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり



中之島線・なにわ橋駅「アートエリアB1」を  
京阪電鉄、大阪大学、地元アートNPOが連携して運営 17

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり



第6回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館  
東武百貨店、立教大学、豊島区、まちづくりNPOが実行委員会を設立 18

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり



柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)は、東京大学、千葉大学、柏市、三井不動産、柏商工会議所、田中地域ふるさと協議会、首都圏新都市鉄道の7つの構成団体により、共同で運営される

19

連携協定締結記念シンポジウム「西池袋を刺激する！」 企業メセナ活動と芸術文化による地域づくり

■むすび

「心」と「かたち」

20



## 東京芸術劇場と立教大学との連携協定記念シンポジウム

—劇場の歴史・劇場の役割・大学の役割・地域の役割について—

2011年11月28日

東京芸術劇場 高萩 宏

### ●劇場の歴史

アテネ 民主主義の発生 演じる・お金を出す・  
見る ルネッサンス時代 市民社会のシンボル 都市の中心

### ●メディアとしての劇場

世界を再現する 社会の鏡 社交の場  
教育の場 楽しみ場の

### ●日本の劇場と西欧の劇場

日本の劇場 勧進のため 木造  
火事・地震 近代の劇場 集会所から創造発信事業の拠点  
公共が支える劇場文化 アートマネジメントの意義

### ●劇場の役割 劇場を中心とした同心円状での役割

500m、5km、50km、500km、5000km、5万 km

### ●劇場のもう一つの役割 ライフシーンに合わせた劇場の役割

未就学児、小学校・中学校 高校生、大学生、若者、大人、  
シニア世代

### ●劇場運営の紡錘形モデル

同心円状に年齢層を積み上げる  
高度資本主義社会の中での劇場運営 公的助成 モデルの固定化

## 当日配布資料③

### ●教育の役割

情報革命の中での教育 社会生活を営む知恵の獲得

### ●大学教育の改革

入学者の増加 進学率の上昇 研究 社会勉強 教員・学生・職員の役割

### ●街の運営

住民・商店街・顧客・乗降客 安心安全 ステークホルダー

### ●現代という時代

世界人口70億人、資源、二酸化炭素  
問題解決のために社会のモデルが必要 科学・宗教・芸術

### ●大学、街、劇場の課題整理 それぞれの課題 緩やかに関係する

ボランティア・アルバイト・短いインターン・ゼミでの授業ではない関係  
事業において学生に場所を作る 新しい公共

### ●池袋西口 立教・街・芸術劇場 土日祝日 夏休み 春休み

夜間 オルガン事業 池袋西口公園の活性化 新たなインターン制度

2011 年度事業報告書 連携協定締結記念シンポジウム／ECO opera!

「“西池袋”を刺激する！—東京芸術劇場×立教大学による持続可能な地域づくり—」

発行日 : 2012 年 2 月 29 日

発行人 : 阿部 治 (立教大学 ESD 研究センター長)

編集・発行 : 立教大学 ESD 研究センター

〒171-8501

東京都豊島区西池袋 3-34-1 ミッチェル館別棟 1 階

Tel/Fax 03-3985-2686

e-mail esdrc@grp.rikkyo.ne.jp

URL <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/index.html>

